ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

ジュラルミンダンボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタシースターポータブル２「小さな翼と歩く悪意」

【Ｎコード】
Ｎ１２０４Ｔ

【作者名】
ジュラルミンダンボール

【あらすじ】
ハローハロー人類諸君。ＳＥＥＤが消え去ってメデタシメデタシってならなくて残念だったね人類諸君。ところで人類諸君。完全に人の形をして、人のように感情を持ち、人に紛れて人のように暮らすＳＥＥＤがもしも居たとしたら人類諸君。人類諸君は、どうするね？

第一話「死にたいわけじゃない。」（前書き）

やっちまった！　なんてこったい！　まぁ良いか。そういうワケでまさかの連載二本目投下です。ファンタシースターポータブル２の主人公がもしも××××だったら？　という内容のお話です。とりあえず主人公のプロフを。

名前：リア・ゲート
性別：女性
種族：ヒューマン（？）
年齢：２７歳
身長：１７４Ｒｐ
体重：６２Ｋｖ
タイプ：レンジャー
服装：上下共にストーリアの黒黒
その他：髪は少し短め。肌が色素が無いかのように白い。瞳は黄色と言うより金色で、白目が黒い。左目を眼帯のようなヘッドマウントディスプレイで隠している。
　程よい大きさと良好な形をしている。

第一話「死にたいわけじゃない。」

「あらあら、随分と人が多いのねぇ～。」
海底レリクスにて。実力さえあれば誰でも可との事だったので来てしまった。面接の後の抜き打ちテストという名の不意打ちに手荒く対処してしまい、随分とひどい怪我をさせてしまったのが悔やまれる。とりあえずは狙い通りに、簡易携帯食の配給が配られる。
適当な場所に腰掛けて配給を食べていると、不意に声を掛けられる。そこそこ身長の高い、男性型のキャストのようだ。
「よう。所属無しって事はフリーか？」
「ええ、まぁ。」
「そうか。それは大したモンだ。場所が場所ってだけに腕利きを集めているのかもしれんな。」
「そうですねぇ。このレリクスは最近見付かったモノ、だそうですね？」
「ああ。発見されたのはごく最近で、この辺りまでは安全なようだが、奥は正に未開の地ってワケよ。久しぶりに儲けが出そうだな。」
「ん～、でも人数が人数ですし、山分けってなると少し心配ですねぇ。何人か殺しておいた方が・・・」
「おいおい、冗談でもそれは止めておけよ？　ここは未開のレリクスなんだ、何が出るか分かったモンじゃない。まぁ、放っておいても何人か死人も出るんじゃないか？」
といった具合の不謹慎極まりない話題で盛り上がっていると、少し離れた所から高くて幼い感じのする、女の子の声が聞こえてきた。
「帰ろう！　帰ろうって！」
男性キャストが後ろの方で駄々をこねている女の子の方を見る。
「なんだ？　あの子供は？」
「さぁ？　実戦未経験（ヴァージン）にしか見えませんけれど・・・？」
女の子が駄々をこねている相手はそこそこの体格を持つ、ロング

コートの男性だった。
「うるせぇ！　今からお前向けの仕事を取ってきてやるから、ココを動くんじゃねーぞ？」
そう言うと、男性は女の子を残して行ってしまった。
「あらあら。こんな所に女の子で一人にするなんて。」
「確かに、あまり気分の良い光景では無いな。まぁ、不謹慎極まりない話をしていた我々にどうこう言える話では無いかもしれんが。」
と、その時。突然大きな地震が起こる。そして出入り口が徐々に閉まっていく。私と男性キャストは出入り口に近い場所に居た。しかし女の子は大分遠い場所に居る。しかもあろう事か頭を抱えて座り込んでいる。これはマズイと思い、女の子に駆け寄って肩に担ぎ上げて走る。
「ふぇ！？　ちょ、あの！」
「あ、暴れないで！　って、うわぁ！？」
女の子が暴れた拍子に床のデコボコに躓いて転んでしまった。お陰で扉が閉まるまでに外に出る事が出来なかった。むっくりと起き上がりながら女の子に話しかける。
「いった～い・・・なんで暴れたの～？」
「だ、だって・・・」
そう言って顔を赤くしながらもじもじと裾の方を若干引っ張っている。
あ、なるほど。そういえば慌ててたせいで担ぎやすさ重視のお尻が前に来るスタイルで担いでいた。これはつまり、扉の辺りに居た人達から見れば「おパンツですよ！　少女のおパンツですよ！」と言わんばかりのスタイルになってしまっていたわけだ。
淑女たるものそこまでキッチリ考えて動かないとね。いやぁ反省反省。
「あらあら、ごめんなさいね～？　あ、私はリア・ゲート。あなたのお名前は？」
「え、エミリア。エミリア・パーシバル。って言うか、今のこの状

況って・・・」
「ええ。閉じ込められちゃった～って状況ね。まぁ扉は開かないモノと割り切りましょう。」
「割り切って～・・・で、どうするの？」
　お尻を無意識にぱんぱんとはたきながら立ち上がり、言った。
「先に進んでみましょう？　もしかしたら、別の出口から出られるかもしれないもの～。」
「え、えぇ！？　先に進むの！？　あ、危なくない？」
「ん～、そうねぇ～。きっと危ないでしょうねぇ～。ま、でも、死んでしまったその時はその時、所詮はそこまでの命だったって事で、良いんじゃないかしら？　それに・・・」
　そこまで言って、愛銃のショットガン、違法改造が施されたシッガ・デスタをナノトランスさせて手元に呼び出し、それを右手だけで持ってエミリアの頭に突き付ける。
「伏せなさい！」
「ひぅっ！？」
　エミリアが頭を下げると同時に引き金を引く。後ろに居たエビルシャークの上半身がアゴと腕のみを残してバラバラに吹き飛ぶ。
　撃った反動を利用して銃を手元に引き寄せて左手でポンプアクションを行い、エミリアが居る側の反対から、私目掛けて飛び掛ってきたエビルシャークに向かって再び発砲する。
　上半身と下半身が強力な力で無理矢理捻じ切られたソフトビニール人形のようにいびつに千切れて分かれ、吹き飛ぶ。
「す、すご・・・。」
「ここはもう安全地帯じゃ無いのよ～？　ここに留まっていると、こういう品の無い方々がわさわさ来る可能性も高いの。だから少なくとも、移動は行うべきだと思うわよ～？」
「う、うん。分かった。って言うか、あんたと一緒に居る事にするから！」
「あら～？」

「だって、あんたと一緒なら何とかなりそうだし！」
「あらあら～。それじゃ、張り切って行きましょうか～。」

「ん～、多いわね～。ちょっと疲れて来ちゃったわ～。この子もそろそろメンテナンスしたいし・・・。」
連続で既に５０体近くを討伐している。いい加減に疲れて来たし、それにシッガ・デスタの銃身も焼けて来た。そろそろメンテナンスが必要そうだ。
と、エミリアが不思議そうな顔で質問をしてくる。
「あれ、シッガ・デスタ・・・っていうかテノラの製品って耐久力が高い事がウリじゃなかったっけ？」
「あらあらよく知ってるのね～？　そうなのだけど、この子は私がアレンジを加えてあげた特製だから、耐久力が著しく低くなっちゃってるのよ～。その代わり、普通のシッガ・デスタなら片手撃ちなんてしたら肩が外れちゃうけど、この子なら多少は平気だし、破壊力は・・・まぁお察しの通り高いしね。」
「ふ～ん。ねぇねぇ、ちょっと貸して？」
「良いわよ。はい、どうぞ。」
周囲に目を軽く走らせながらエミリアに渡す。
手に取り、隅々まで観察するエミリア。その眼はまるで、他社の武装の研究を行っている技術者のように鋭くそれでいて好奇心に溢れている。
「ふ～ん、なるほどなるほど。緩衝装置の全長を伸ばして反動を小さくしつつ、広がったリアクターのスペースにもう一つ、ハンドガン系のリアクターを積んだのね。どうりで長く見えたワケだ。なるほど、これなら威力も上がるし反動も小さくなるね。でもコレ、作りが荒いよ。これじゃぁ折角のフレーム剛性が台無しじゃない？
それに、この銃身材って軽さを基準に選んだでしょ？　これって熱

に弱いから銃身材には向いてないよ？」
それを聞いて悔しさ半分に少しイジワルを言う。
「あらあら～。じゃぁ今度、エミリアに改良をお願いしようかしら～？」
「え、あ、いや！　無理無理！　あたしのは知ったかだし！」
無理！　絶対無理！　と連呼しながら私にシッガ・デスタを返そうとこちらに来るエミリア。と、ここでエミリアを左手で突き飛ばして半歩下がる。私が居た所とエミリアが居たところの丁度重なる辺りに、亀のような形の変な外見のスタティリアの一種がこちらに向けて砲弾のような物を撃ってきた所だった。
私は仕方なく右手を変化させてブリンガーライフルにして構え、撃ちこむ。しかし射撃に耐性があるらしく、効果は薄そうだ。しかし、それでも数を撃ち込めば話は別だ。無数の黒いエネルギー弾にとうとう装甲を貫かれ、蜂の巣になるスタティリア。尻餅を付いているエミリアに駆け寄って声を掛ける。
「大丈夫だった？」
「う、うん。平気だけど、その銃は？　今、ナノトランスしないで出したように見えたけど・・・？」
「え？　あ、いやぁ気のせいじゃないかしら？　ちゃんとナノトランスしたわよ～？」
「いや、でもこう、ニュッって・・・」
「いやいやいやいや、気のせいよ気のせい！　さ、早く立って！行きましょう？」

「それにしても、なんでレリクスなんてあるのかしらねぇ？　ねぇエミリア？」
話が途切れたので苦し紛れに強引にエミリアに話を振る。
「う～ん、それには諸説あるらしいんだよね。ともかく旧文明が存

在してた事は間違い無いとして、何故旧文明人はどうしてレリクスみたいな建造物を作ったのか、なんだけど・・・旧文明人が生きた時代にもＳＥＥＤの襲来があって、身を守る為に建造したっていう説が多分一番代表的なんじゃないかな。確かにこの説は信憑性が高いんだけど、でも矛盾点もあるんだよね。まず第一に、既にＳＥＥＤは封印されて全滅してるハズなのに、何故こうして新たに起動したレリクスが有るのかって事。次に、対ＳＥＥＤの為ならどうしてＳＥＥＤの襲来と共に一斉に起動しなかったのか。有る程度の間を置いて、それぞれがそれぞれのトリガーに合わせて順次起動していったとすると、単純に対ＳＥＥＤ用とは考え難いんだよね。他にも、色々とあって・・・あ。」

私がポカンとして聞き入っている事に気付き。硬直するエミリア。私はそんなエミリアを目を丸くして見つめながら、素直な感想を述べる。

「詳しいのね～。びっくりしたわ～・・・。」

エミリアが若干慌てた表情で言う。

「え！？　あ、いや、常識よ、常識！　傭兵ならこの位知ってて当たり前なの！」

「あらあら、じゃぁ私はニワカなのかしら～？」

「う、うぅぅぅ・・・・」

エミリアが不機嫌そうな顔をする。

「も、もう！　ほら、さっさと行こう！　早く出口見つけて、早く外に出て、早くあのおっさんに文句言いまくってやるんだから！」

「おっさん？　って、あのロングコートの？」

「あれ、知ってるの？」

「う～ん、詳しくは分からないわ～。エミリアが駄々をこねていた相手でしょう？　その程度。」

「え、まさかさっきの見てた？」

「ええ、ばっちり。「いやだ～、帰りたいよ～！」って駄々をこねている所の一部始終。」

ほぼ完璧な声真似に自画自賛したくなる気持ちを乗せてエミリアにどや顔を見せ付ける。何故か少し落ち込んだ表情をするエミリア。表情豊かでカワイイ子ねぇ～。
「うぅ、見られてたんだ・・・あのおっさん、あたしが働かないからって無理矢理軍事会社なんかに入れて、しかもいきなりこんなレリクスにほっぽって！　あ～、もう！　何かむしょうに腹が立ってきた！　ねぇ、こんなか弱い女の子をレリクスに放り出すなんて酷いと思わない？」
「そうね～、確かにちょっと厳しいわね～。」
「そうだよね！　そりゃぁあたしも仕事を選り好みして全然やらなかったけど、これは流石に酷いよね！」
「ん～、選り好みするのはともかく、全然働かないのは問題じゃないかしら～？」
「え～？　何、もしかしてあんたもおっさんの味方～？」
「そんな事は無いわよ～？　ただ、ちょ～っとエミリアに同情の余地が少ない気がしただけ。まぁ、ここから脱出して、言いたいだけ文句を言えば良いんじゃないかしら～？」
「ぶ～、なんか誤魔化された気がする～！　ま、それもそうだよね。よ～っし、絶対にこっから脱出するぞー！　おー！　・・・って事で、よろしく！」
「・・・あんまり、人に頼り過ぎるのは良くないと思うわよ～？」

「ここは・・・」
大きな通路のようなスペースに出た。両側にはズラリと大きな騎士のような形の物体が。何だか微妙に荘厳な雰囲気で思わず立ち止まってしまう。
「こ、これ全部、人型の大型機動兵器だよ？　タダでさえコッチ見てて怖いのに、動き出したらって考えると・・・うぅ、早く行こう

よ～・・・。」
エミリアが後ろに隠れるようにすがり付いてくる。背後のエミリアを見て、思わず顔が綻んでしまった。
もし、自分にこの位の子供が自分に居たらきっとこんな感じなんだろうな、なんて考えてしまって。
と、エミリアの側からは反対側、私から見れば前の方から大きな駆動音がした。振り向くと、こちらを向いて武器を片手に吼えている。威嚇のつもりだろうか。エミリアが慌てた声で言う。
「ちょ、ちょっとちょっと！　言ったそばから動き出さないでよ！」
私は左腕でエミリアを制する形を取り、エミリアに言う。
「少し下がってなさい。」
「え！？　む、無茶だよ！　あんなデッカイの相手に一人なんて！」
エミリアの方に目を向け、少し強く言う。
「じゃぁ、手伝ってくれるの？　いえ、あなたに私を手伝える？」
「う、そ、それは・・・」
「なら下がってて。大丈夫、あの程度ならいくら出て来ても負けないわよ。」
エミリアが悔しそうに唸り、そして言う。
「わ、分かったわよ！　あんたのその大丈夫って言葉、信じるからね！」
「えぇ、信じて待ってて。」
そう言って、目の前まで近付いていた巨体の機械騎士と対峙する。
大斧を横に構える。それを見て高くジャンプする。足元を一撃必殺の破壊が通り過ぎる。私は空中で機械騎士の頭にショットガンの照準を合わせ、抜群の破壊力を持つ銃弾を撃ちこむ。しかし、
「あらあら、硬い子ね～？」
確かに少しだけ装甲が剥げた。しかし停止にはほど遠い。これは装甲部分に撃ちこんでも大したダメージにはなりそうもない。それならと着地と同時に横っ飛びに斧の大きな縦振りをかわして脇腹辺

りの装甲の無い部分を狙う。ショットガンの銃身をほとんど刺し込むように突きつけて引き金を引く。すると、
「ＧＷＡＲＲＲＲ！！！！！」
巨体が大きく揺らぐ。なるほど、やはり。硬いのは装甲だけ、むしろ脆い装甲の下を覆い隠して守るための堅固な装甲というわけだ。それからも攻撃をかわしては装甲の隙間に銃弾を撃ちこんでいき、とうとう完全に動きを止めるに至る。
「ふぅ。ま、意外と楽しめたわね～。」
そんな事を言っていると、後ろからエミリアが驚いた顔でこちらを見ている。
「す、すごい・・・あんな大きいの、一人でやっつけちゃった・・・。」
「ふふふ～、ね？　大丈夫だったでしょう～？」
「う、うん！　ほんと、すごいね！　ちょ、ちょっと信じてみて良かったかな～って・・・。」
「あらあら、それは良かったわ～。」
そう言って二人でしばし安堵の空気に浸っていると、そいつ等は突然、全機、ほぼ同時に動き始めた。エミリアに近い機体がエミリアに容赦無く襲い掛かる。
「え・・・？」
そう言って驚愕の表情のまま固まってしまうエミリア。私は機械騎士が動き始めたのとほとんど同時に地面を蹴って駆け出していた。
そしてエミリアを弾き飛ばすと、ショットガンを盾にして大斧の一撃を受け止めようとする。しかし、もう限界だった。
ショットガンは大斧の一撃を受けた瞬間、ひび割れ、砕け、細かなパーツと壊れたフレームの破片と化した。
そしてある程度は勢いが減殺されていたとは言え、大斧の一撃が左側頭部から頭部の四分の一近くを削いでいった。
粉々の破片になって粉砕される眼帯のようなヘッドマウントディスプレイ。

しかし、私は倒れない。それ所か、血の一滴すら出ない。削がれ、宙を舞った左側頭部がべちゃりと汚らしい音を立てて地面に落着し、その場で黒い粒子となって霧散する。

それは撃破されたＳＥＥＤフォームのそれと良く似ていた。

私の中から、今まで私の形として丸め込んでいた物が、黒い液体のように左側頭部から溢れ出す。

それは私の左半身、特に左腕を瞬く間に覆い、影のようにも見える真っ黒いそれは瞬く間に大きくなり、それらを螺旋状に隠すようにして、緑色の点滅する点が規則正しく並ぶ紫色の帯のような物が覆い、それは最終的に太く、禍々しい、巨大な蔓とその先端に蕾のような形の膨らみのある触手のような物となった。

私はそれを大きく振り、真横から機械騎士に叩き付ける。機械騎士は上半身だけがちぎれるようにして壁に叩き付けられ、粉砕し、その場には支えるべき上半身を失った下半身だけが残っていた。

エミリアが驚愕と恐怖を顔いっぱいに表現した表情でこちらを見る。私は左腕の触手を大きく振るう。エミリアが体を小さくするが、勿論エミリアを狙ってはいない。

エミリアを後ろから狙っていたやつを叩き潰したのだ。エミリアが恐る恐ると言った感じで顔を上げ、そしてこちらを見ると同時に叫ぶ。

「う、後ろぉ！！！」

その瞬間、後ろを振り返るが間に合わず、胸に深々と大斧が抉りこみ、地面に叩き付けられてから完全に背中に貫通する。その後もう一機が現れ、二機で私をメチャクチャに叩き潰しまくる。末端が幾ら破壊されても平気とはいえ、そのメチャクチャな斧の中には核に致命傷を与えるような一撃も当然のようにあったワケで、私の意識が段々と薄れていく。

私が動かなくなったのを確認したのか、二機の機械騎士はエミリアにゆっくりと歩を進める。私はギリギリで動く首でエミリアの方を見る。

エミリアの後方からはさらにもう一機が近付いている。私は渾身の力を振り絞り、体の大きく開いた傷口から左腕と同様の触手、しかしサイズは少し劣る触手を十本ほど飛び出させて私をメチャクチャに叩き潰した二機を突き刺し、完全に破壊する。しかしそこで力尽きてしまう。体から飛び出させた触手が黒い粒子となって霧散する。私は薄れていく意識の中で必死に口を動かす。しかし動いてるかどうかも分からないし、そもそも声が出ていない気さえする。目も一応開けているつもりだが、他人から見れば閉じているかもしれない。

私の口の動きに気付いたのか、それとも本能かは分からないが、エミリアが私に走り寄る音が聞こえる。そして何か・・・恐らくはエミリアに揺さぶられる。一揺れ、二揺れと段々と意識が薄くなっていく。

「どうして・・・どうしてあたしなんか庇って・・・ねぇ、ねぇ起きて、起きてよ！　どうして・・・？　どうしてみんなあたしを置いてっちゃうの・・・？　お願いだから、目を開けてよぉ・・・あたしを・・・一人にしないでよぉ！！」

その瞬間、不思議な物を見たような気がした。エミリアの顔に浮かぶ回路のようなオレンジ色の線、エミリアの背後に浮かぶ円のような物。そして・・・

「あなたを・・・死なせはしません！」

・・・・・・女神？

第一話「死にたいわけじゃない。」（後書き）

はい、ようやっとプロローグ終了です！　長いね！　まぁ原作がこうだから仕方ない！　で、ネタばらしをしますと、主人公は元人間の人型ＳＥＥＤです。まぁ過去のお話とかは次回があれば追々という事で。ではでは。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（前書き）

リアちゃんの口調が乱れますが、仕様です。ええ、仕様ですとも。
では第二話、ごゆっくりとお楽しみくださいな～。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」

「・・・ん・・・」

なんだか妙に眩しい。なんだ、地獄っていうのも案外にも明るい物なんだなぁ。そう思いながら目を開ける。

目の前にグラマラスなスタイル抜群のひ・・・キャストが居た。

「アラ、おっきしたネェ。チョット待っててネ？」

そう言ってキャストの女性が奥の方を向いて誰かを大きな声で呼んでいる。

私はその間、周囲を見渡す。派手さの無い質素な、良くある作りの、随分と小奇麗な・・・事務所？　か何か。何より地獄の割りに明るいし、天国に私が来れるとは到底思えない。

と、言う事は・・・生きてる？　いや、それは考え辛い。だってあの時、私は核に致命的なダメージを受けたし、そうじゃ無くても形状を保存しておけない程までに全身にダメージを受けていた。「中身」丸出しならいくらでも生きていられるけれど、それにしてはキャストの対応が普通過ぎる。

人類種の天敵を目の前にしたら普通はもう少し慌てたりしそうなモノだけど。と、言う事は姿形に関してはちゃんと人間のフリができテる？　ソれにしテもミンなオイしソウ・・・

ハッと気付いて左目を押さえる。眼帯、もといヘッドマウントディスプレイが無い。慌ててタオルをナノトランスさせて取り出し、左目が隠れるように押さえ、簡単な眼帯の代わりにする。

応急処置だが仕方が無い。後でどうにかしてライアさんに連絡を取ってまた作ってもらうとしよう。頭の後ろでしっかりと縛り、ズレない事を確認すると近付いてくる足音に気が付く。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「あ、はい～。お陰さまで～。」

そう言って声を掛けて来た男の方を見る。背の高いビースト。色

のセンスがイマイチなロングコート。ボサボサの髪とヒゲのせいで、顔が鼻と頬ぐらいしか見えていない。
胸元を大きく開けており、そこにはぶ厚い胸板が。少しむさ過ぎる。年も相当行ってそうだし、あまりタイプじゃないかな。オイシソウダケド。
「？　どうした、そんなにジロジロ見て？」
「い、いえ。何でも・・・あ、それより女の子を知りませんか？」
「あ？　女の子だぁ？」
「こう、金髪で、赤い目の・・・」
「金髪で赤い目？　あ～、アイツか。今呼んだ所だ。そろそろ来んだろ。」
と、後ろのドアが開いた音がした。それと同時に何だか落ち込んだような女の子の声が聞こえてきた。
「う～、おっさん、今日くらいはかんべんしてよね～・・・。あたしがどんな目にあったか知ってるでしょ～・・・。」
「知らねーし、興味もねーからかんべんしねーよ。ったく、客の前でそんな顔すんじゃねーよ、みっともねぇ。」
女の子が不満そうな顔でおっさんと呼んだビーストの男を軽く睨んでからこちらを向く。
「えっと、初めまして。って、どっかで会ったような・・・？」
その女の子を見て、私も驚く。
「エミリア・・・！　良かった～、無事だったのね～？」
「あ、あんた・・・どうして生きてるの！？　ねぇ、何で！？　何で、おっさん！？」
「あら心外。何だか生きてちゃいけないみたいな言い方ね～。」
「人を勝手に殺してんじゃねーよバカ！」
おっさんに罵られても特に意に介する風も無く、
「良かった～、ホントに良かった～。アレで死なれてたら一生モンのトラウマだよ～。良かった～。そうだよね、あそこで起きた事って全部夢だったんだよね、良かった～・・・。」

何度も「良かった～」を繰り返して安堵するエミリアそれを見ておっさんが小声で
「よーしよーし、狙い通りエミリアも良い感じに懐いてるな・・・」
と言った後、こちらを向いて手を肩に掛けて少し顔を近づけて言う。お酒臭い。
「お前さん、フリーなんだろ？　丁度良い、このままウチの会社に入っちまえ。今なら住む場所と居ないよりはマシ程度のパートナーも付けてやるぜ？　どうせ身寄りもねーんだろ？　ウチは働きの良い社員にはボーナスもはずむぜ？　どうだ、このご時世乗らねー手はねーだろ？」
「へ～、パートナーまで付けるなんておっさんも珍しく太っ腹だね～。」
意外な一面を垣間見て関心したような表情のエミリアに、おっさんが肩越しに呆れたような目線を投げ付ける。
「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってんだろ。」
そう言うと共にこちらに向き直り、口角を少し引き上げて若干黄ばんだ歯を見せながら私に聞いてくる。
「で、どうする？」
「ちょ、おっさん！　あたしにも選ぶ権利を・・・」
「義務も果たせねーようなバカに権利なんざねーんだよ！　で、どうする？」
正直、かなり悩む。確かに一人で動くのはいい加減にキツくなって来た。常に食べ物に困る生活はもう嫌だ。
しかし正真正銘の「おばけ」が果たしてヒトの集団の中で生きられるのだろうか？　正直、正体を明かさずに輪に入って正体を明かした時の反動が怖いし、それならばと正体を明かしても、当然の如くに弾かれるのがオチだ。なら、やっぱり・・・
「えぇと、嬉しいんですけど、お断りさせて・・・・」
「おぉそうか。いや、しかしな。ウチも慈善事業をやってるワケじゃねーんだ。」

「へ？」
電卓をポケットから取り出して、何やらポチポチと打ち込み始める。
「えぇと？　ココまで運ぶ運搬代金と、メディカルチェックの費用、そんで起きるまでの護衛代金、コイツに人件費と燃料代と手数料を併せると・・・ま、ざっとこんなモンだな。」
電卓を突きつけてくる。と、それを見た時に、やっぱり人類が嫌いになりそうになった。
「ご、五百万メセタって・・・・・」
「即金で払えるか？」
「これだから人類は・・・・（ブツブツ）」
「あぁ？　なんか言ったか？　で、払えるのかどうなんだ？」
「払えませんよ～！　こんなの平均的なサラリーマンの年収から税金を引かなかった額と同じぐらいじゃないですか～！」
「払えねぇだぁ？　しっかし払ってもらわなけりゃコッチも困るんだよな～？」
「ぐぐぐ・・・」
食い殺してやろうか。本気でそう思った。しかし今そんな事をしたら今の今まで平和的に過ごして来たのが全て泡と弾けてしまう。
殺意をグッと飲み込んで、今取れる最善の選択を取る。
「分かりましたよ・・・。」
「よし、決まりだな。既にお前のマイルームは用意してあっから。おい、エミリア。コイツを部屋まで案内してやれ。」
「なんであたしが・・・」
「何か言ったかゴクツブシ？」
「なんでも無いですー！　はぁ。じゃ、あたし居住区の入り口の前に居るから。」
そう言って出て行くエミリア。
「親子仲、悪いんですね～？」
「はぁ？　親子？　誰と誰がだよ？」

「おっさんとエミリア。」
「おっさんってなぁお前・・・そういや自己紹介して無かったな。俺はクラウチ・ミュラー。お前は？」
「リア・ゲートです～。」
「ワタシはチェルシー！　ヨロシクネ～！」
「あ、はい～。よろしくお願いします～。」
「おうチェルシー、どさくさ紛れに自己紹介たぁ流石に抜け目ねぇな。で、書類は？」
「モチロン持ってきたヨ～♪」
そう言ってチェルシーが私に書類を差し出す。
「ココと、ココに署名、お願イネ。本人直筆のサインじゃなキャ無効扱いにされチャウからネ～。」
「はい～。」
そう言って指定された場所にサラサラっと書く。本人直筆、かぁ。既にリア・ゲートって名乗って良いのか分からないぐらいになっちゃってるけど、それでも本人で良いのかな。
そう思いながらもう一箇所にも名前を書く。
「はい、できました～。」
「ウン、コレでオッケーネ。これカラもヨロシクネ？」
「はい、よろしくおねがいします～。さてと、それではこれで～。」
そう言ってその場を後にする。

「ふぁ～ぁ・・・ねむ。あ、やっと来た！」
「あらあら～、待たせちゃってごめんなさいね～？」
「まったくもう！　ま、良いや。とりあえず部屋まで案内するからついて来て？」
そう言って歩き出すエミリア。レリクスの時もそうだったけれど、

こうして改めてみると本当に普通の子供にしか見えない。そういえばあの女神は一体何だったのだろうか？
　思えばかなりキワドイ服装をしていたようにも思える。とはいえ、きっとあのレリクスでの出来事は夢だったのだろう。そうに違いない。でなければあんなに理想的な死に時がるハズが無い。そんな事を考えていると、エミリアがとある一室のドアを開ける。
「ここが、あんたの部屋。で、あたしの駆け込み部屋！」
「あら、今まで嫌なことがあったらここに駆け込んでたの？」
「ううん、どうせあんた一人でしょ？　何かあったら入れさせて貰うから！」
「えぇ～・・・。」
　別に構わないが、それにしても・・・。
「本当に普通のお部屋ね～・・・何があるワケでも無いし・・・むしろ落ち着かないわ～。」
「あ、それならインテリアショップに行けば？　テーブルとか箱とか色々あるよ？　勿論リフォームチケットもね！」
「ん～・・・私、お金が無いのよね～・・・。」
「え？　もしかして・・・？」
「えぇ、一文無し。そもそもあのレリクス調査に参加した目的だって携帯食料が主な理由だったし・・・。」
「あ、あはははは・・・フリーの傭兵ってのも大変なんだね・・・。」
「まぁ私の場合、身元が戸籍から出生届から根こそぎ無くなってるのもお仕事が取れない原因だったりするんだけどね～。」
「ふ～ん。」
　そうだけ言うと、エミリアが目をショボショボさせながらベッドに腰掛ける。
「あ～、駄目だ。ホントに眠い～・・・。」
　そう言うと共に全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようにベッドに倒れこむエミリア。部屋を軽く見回しながらエミリアの傍に腰を掛ける。

フッと思いついて、右手をブリンガーライフルの変異させる。どうやら体の方に異常は無いようだ。右手を戻すと、エミリアの寝顔を軽く観察する。

こうまじまじと見ると、一応は同性の私も少しドキッとしてしまう程度に可愛い。スヤスヤと寝息をを立てて、ほんとウにカわいラしイ。まったくホんトウにオいシソウ・・・・・・・・・・。

ハッとなって頭を振り、自分の頭の中の思考を掻き消す。とりあえず手元にはまだ３００メセタほど残っていた筈だ。飲み物でも買って来て落ち着こう。

腰を上げてドアから外に出ようとする。その時だった。

「待って。」

後ろから、つい最近聞いた気がする女性の声が聞こえた気がしたのは。

「ここでなら・・・二人で話が出来そうだから・・・。」

さっきまでベッドで寝ていたハズのエミリアが、おぼつかない足取りで部屋の真ん中に立っていた。そしていつか見た、あのオレンジ色のような金色のような回路がエミリアの全身に走る。

そしてエミリアの体から出た金色の光が一箇所に集まり、そこに女の人が現れた。

見惚れるほど美しい人だった。

流れるような金色の長い髪。

文句の付けようの無い抜群のスタイル。

その均整の取れたスタイルを見せ付けるかのように露出度の高い服装。

そして優しさを秘めた金色の瞳。

何処を取っても私より女性的で美しい女性だった。

が、何かおかしい。

この人、そこに居ないように見える。

もっとも、物理的にエミリアの体の中にこの身長の人が入っていられるわけが無いのだから、立体映像的な何かと考えるのが道理だ

ろう。
　生体をナノトランスしたと言うのなら、ハンディサイズのトランサーで生き物が生きたままにナノトランスできている事に疑問があるが。
　と、その少し変な女性が語り始める。
「私はミカ。訳あってこの子に宿る、意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は「旧文明人」となりますね。」
　話がいきなり突拍子も無さ過ぎてどうにも言葉が見付からず、呆然とする。そしてミカが、旧文明に起こったＳＥＥＤの襲来と、その旧文明が計画し、実行に移した「復活計画」に関して話し始めた。

　大まかに話し終えると、ミカがこちらを見据えて、頭を下げる。
「どうか、この忌わしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？　この子は・・・心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです。」
「でも、あなただって旧文明人でしょう？　なら、何故阻止しようとするんです？」
「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。」
　そう言って一息付いてから、ミカが先ほどまでよりも、より一層深刻な顔をして、語り始める。
「・・・それに、貴方にとっては既に私の存在は他人事ではないのです。・・・何故、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか・・・？　そしてあのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは、本当に夢だったのでしょうか・・・？」

その時点で、嫌な予感が胸を過ぎる。と、確信的な一言を、ミカが言い放つ。
「・・・貴方は、生きているのでしょうか？」
私はその一言を聞くと同時に、ミカに掴みかかった。しかし実体は無く、手は空を掴むばかりだった。両手を握り、歯を食いしばり、普段では有り得ないほどに語気を荒げる。
「何で私を生き返した！！？　あのまま死ねばようやくこの太陽系から最後のＳＥＥＤフォームが消えたハズなのにッ！！！　あのまま死ねば私はまだリア・ゲートとして死ねたハズなのにッ！！！
一人の「人間」として死ねたハズなのに！！！！」
「ッ！」
「どうして・・・どうして私を死なせてくれなかったんだッ！！！
ＳＥＥＤフォームなのはアンタだってすぐに分かったハズだ！！！！　私の身体は・・・私の身体はもう、戻れないんだ・・・・・。」
その場に俯き、へたり込む。歯を食いしばって、拳を握り締めて。夢であって欲しかった。あのまま死にたかった。あれ以上の死に時なんて、もう二度と無いだろう。
後はもう・・・また精神を侵されて、人を襲う単なるＳＥＥＤフォームに逆戻りして、その時の英雄に討たれるしか、もう無いのだろう。
「何で・・・どうして・・・・・」
涙は出ない。もう涙腺が無いから。鼻水も出ない。鼻はあるが、これは「リア・ゲートの顔」を再現する為の形だけのパーツであり、装飾品だから。
ミカは言葉が見付からないらしく、ただ、申し訳なさそうに斜め下に視線を落としている。
「・・・ふぁ・・・。」
エミリアが寝返りをうつのを見て、ミカと私は同時にハッとする。と、同時にミカが少し慌てた様子を見せる。

「そろそろこの子が目を覚ます。詳しくはまたいずれ・・・。」
そう言って消えるミカ。と、エミリアが目を覚ましそうになるのと同時に、部屋の真ん中でへたり込んでいるのは流石に変だろうと思い、慌ててベッドの上で横になっているエミリアの隣に腰を掛ける。
「・・・ふぁ、ぁっ。んー、ちょっと寝ちゃった、かな？　・・・ん？　あのさ、なんでこっち見つめてるの？」
「へ！？　え、えぇと・・・あ、寝顔を見てたのよ！　可愛いな～って思って～。」
「ちょっ・・・！　寝てるのに気付いてたんなら起こしてよ！」
「ん～、あんまり可愛い寝顔だったから～♪」
「あーもう、恥ずかし・・・」
そう言って少し目線を外すエミリア。内心冷や汗ダクダクだったのだが、汗腺も無いお陰でどうにか誤魔化しきれたようだった。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（後書き）

へーい、第二話ですだよだぜー！　もう第一話から二ヶ月と半月ぐらいが過ぎてようやっと第二話とかマジ遅すぎっすよね。すいません。まぁサブ何で、そんなモンです。まぁ実際の所を言うと、感想を頂いたのが嬉し過ぎて、執筆ハイブースタが掛かって止まらなくんっちまったのが原因なんですがね。ってな感じでまた次回！

これ、完結まで相当掛かるよなぁ・・・。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（前書き）

リアちゃんの知っている情報は大体三年前ぐらいから止まってます。でもパルムで生活していたので一部情報は一応知ってます。その内昔話とかしっかり書けたら良いなッ！

第三話「それでも私は幸せでいたい。」

次はマイシップに案内すると言うエミリアを一旦部屋から追い出して、ライアさんに連絡を取る。

何でもライアさんはどこかのエライ人らしいのだが、詳しくは知らない。

知り合ったのは偶然にも病室のベッドが隣り合わせだった事からだ。バイクで事故を起こしたとかで、立派な体格のやたら威厳のあるビーストやらキャスト、華奢で上品なニューマンやパリッとした正装のヒューマンなんかが連日見舞いに来ていた。しかも全員やたらと低姿勢だったのが印象的だった。

隣のベッドで精神病患者さながらにロープでベッドに拘束されていた私に向こうから話し掛けてきた時は驚いたものだ。少ししてすぐに打ち解けたのだが、その頃にはライアさんは先に退院してしまった。しかし時折お見舞いに来てくれて、しかも無料で特注の「凄い眼帯」を作ってくれた。

ライアさん曰く、「壊れたらまたいつでも新しいのを用意してやるよ！」との事だった。そのお返しに、私はライアさんがお仕事で疲れた時なんかに一緒に街に繰り出して遊んでいる。

何でも立場上、仕事仲間とかは遊び等には誘い難いらしい。とはいえ、亜空間航行の実験やら何やらでライアさんの所もここの所は忙しいらしく、最近は随分とご無沙汰なのだが。

ライアさんに教えてもらった個人回線の番号に掛ける。そういえば、このビジフォンから掛けるの初めてだな。でもきっと個人回線に掛かってきたら出てくれる人だろう。

『誰だ？』

ほらね。

「あ、ライアさん。お久しぶりです～。」

『おぉリア！　久しぶりだねー元気してたかい？』

「はい、お陰さまで～。聞いてくださいライアさん！　私、ついに職に就けたんですよ！」
『おぉ、やったじゃないか！　じゃ、何かお祝いにプレゼントとか用意しないとな～。』
「あ、それでしたらあの、頼みたい事がありまして～。」
『頼みたいこと？　・・・あぁ、眼帯の修理とかかい？』
「いえ、完全に壊れてしまったので新調してもらいたくて～。お願い、できますか～？」
『あぁ、分かった。で、何か追加したい機能とかはあるか？』
「う～んと・・・サーマルスコープと撮影機能、ですかね～。」
『撮影？　なんだ、お前が着いた職業って情報屋か何かか？』
「いえ、折角腰を据えて仕事が出来るんですし、仕事仲間との思い出とかを写真にしたいなと思いまして～。」
『なるほど、な。分かった。技術部の連中に伝えとく。』
「あ、あともっと頑丈にしてください。」
『具体的には？』
「ん～と～・・・真正面からの艦砲射撃に耐えられるくらいで～。」
『ハハハッ！　そりゃまた面白い注文だ！　分かった、限界まで頑丈に作るよう言っておくよ。じゃ、いつ頃になるかは後で追って連絡する。じゃ、またな。』
「ええ、また。お体に気を付けてくださいね、ライアさん。」
『ああ、お前もな、リア。』
　通信を終えてビジフォンをシャットダウンする。それから部屋の倉庫の手前の方に仕舞われていたパートナーマシナリーを起動して、基本設定を済ませる。
　これで部屋に戻って来た時にはエミリアが乱して行ったベッドメイキングも完璧にしておいてくれる事だろう。
　もし上手く行ってなくてもその程度のポンコツであると認識しておけばそれ以降は過度な期待をしなくても済む。
　起動準備に入っているパートナーマシナリーを置いて、先に行か

せていたエミリアに合流する事にした。

「あ、やっと来た。じゃ、次はマイシップの説明をするからね。」
そう言ってまるでメモを暗唱して来たかのように業務報告と言った感じで淡々と説明される。その手際の良さは何度もこう言った経験をして体で覚えているのではと思わせる程だった。

転送装置からマイシップ内に入る。その瞬間、私は思い切り目を見開いて驚く。
「モデル９９９９（フォースナイン）！？　うそ、何でこんな高いのが・・・」
そう。この社用として使われている船は各惑星の要人や金持ちが使っているような超高級モデルなのだ。
確かにこれならば三惑星間を休む事無く２４００時間飛び続けても壊れる心配も無いだろうし、ワープゲートを使わなくても別の惑星までほんの数時間で到着できるだろう。
しかしここで疑問が湧く。
「・・・何で社用の船はこんなに立派なのに、事務所は普通なのかしら～？」
「あ～・・・この船今は社用として使ってるけど、元々はリトルウィングの社長のウルスラさんが個人で所有してた物らしくって。リトルウィングを創設した後になって社用船が無い事に気付いて、仕方なく個人用の船をいくつか社用にしたんだってさ。」
「なるほど～・・・そのウルスラって人、相当儲けてるわね～。」
「まぁ、ウルスラさんだしね～・・・。」
そう言って少しだけ遠い目をしていたエミリアが、一つ可愛らしい咳払いをしてからまた説明を始める。
私はそれを適度に聞き流しながら船内の隅々に目を這い蹲らせる。

非常に綺麗に整備されているのでパッと見では分からないが、これはかなり使い込まれている。モデル９９９９は金持ちがステータスとして持っている程度の事が多いのでここまで使い込まれている物は非常に珍しい。
そしてメインコックピットを細かく見て行って、驚愕する。
コイツ・・・改造船だ・・・！
法定速度を大幅に超える速度まで示せる競技用船のスピードメーター。更に本来なら設置されていないハズのターボロケットの稼働率を示すメーターまで追加されている。何より通常とはまるで形状の異なるコンソールがこの船全体の恐るべき改造具合を如実に示していた。
「ちょっとー！　船ばっかり見てないであたしの話を聞けー！」
耳元で叫ばれて慌ててエミリアの方を向く。
「あ、ごめんなさいね～エミリア～。ちょっと夢中になっちゃって～。」
「まったく！　あ、そうだ、会社ではあたしの方が先輩なんだから、敬うようにね！」
「あ、はい～。よろしくお願い致します～。」
「うわ、駄目だ。キモチワルイ。やっぱ今まで通りで良いや。」
「あ、あら～？」
そう言ってちょっと困惑していると、エミリアは手近の椅子に座って全身から力を抜いたようにダラッとする。
「は～あ、それにしても今日は色んなことが一辺に起きて疲れた～・・・。初めての仕事でしょ？　いきなりレリクスに閉じ込められちゃうし、あんたは・・・その・・・」
そう言って言葉に詰まるエミリア。しかし私を見て少しだけ口角を上げると共に、
「まぁ、全部夢よね夢！うん、白昼夢！　第一アレで生きてるハズ無いし！　あんたが生きてるって時点で夢確定よね！」
「あらあら～、私はエミリアの夢の中ではどんな死に方をしたのか

しら～？」
　そう言いつつ、エミリアの座っている椅子の肘掛に腰を下ろす。
「う、それはあんまり・・・でもまぁ、その・・・あたしが言った事を・・・その・・・信じてくれたのは・・・嬉しかった、かな・・・。ま、夢だけどさ。」
その俯きながら恥ずかしそうに言うさまが余りにも可愛らしく、私はエミリアの頬っぺたを突付きながらもの凄く笑顔になる。
「エミリアったら可愛いこと言っちゃって～♪食べちゃいたくなるわね～♪」
「え！？あ、まさかソッチ系の・・・」
「言葉の綾よ～♪可愛い♪」
「むー！　と、ともかく！　あんたのこと色々教えてよ！」
　そう言うと共に跳ね上がるようにして椅子から立ち上がるエミリア。立ち上がってから半回転してこちらを向くと、人差し指を私の鼻に突きつけて言う。
「わたし達、パートナーなんだから！」
「でもヒトに指差すのは止めておきなさいよ～？」
「う・・・は～い。」

　私は完璧にＳＥＥＤだった。いや、人として生活はしていても結局、今でも私の身体はＳＥＥＤフォームである事には間違いは無いのだが。
　それでも、自己を認識する上で私はヒトであるよりＳＥＥＤであると認識していた時期があった。今ではすっかりヒトを取り戻せているが、それでもやっぱり身体の方はＳＥＥＤのままだ。
　それがどうしようも無く悲しく、どうしようもなく虚しい。

結局、私はどちらなのだろう？
私はヒトなのだろうか？
一月も飲まず食わず眠らずで居られるヒトなんて私は電源を落としたキャストぐらいしか知らない。
私はＳＥＥＤなのだろうか？
ＳＥＥＤウィルスを自発的に散布しないように務めるＳＥＥＤフォームなんて聞いた事が無い。かのヘルガ・ノイマンですら他のヒトにＳＥＥＤウィルスを植え付けて散布していたのだから。
私はヒトなのだろうか？
身体を変異させ、ＳＥＥＤフォームを産み出す事で無限に近い戦力をその身から搾り出す事の出来るヒトなんて有り得るハズが無い。
私はＳＥＥＤなのだろうか？
ヒトを庇って死ぬ事を望むＳＥＥＤフォームなんて有り得るのだろうか？　ヒトを大事に思うだけの心を持ったＳＥＥＤフォームなんて有り得るのだろうか？
私はどちらなのだろうか？
心はヒトであると信じたい。
だが身体がＳＥＥＤである事は否定のしようが無い。
私はＳＥＥＤとして沢山のヒトを殺した。
その何れもが死んでも仕方ないと言われるほどの最底辺とも言える連中だったとしても、私は本当に沢山のヒトをその手に掛けた。その中には私の両親も含まれている。
両親に関してだけは「子供達」に任せず、自分の手で殺した。頭から硬い金属製の床に向けて叩き付けた。小汚い花を床に咲かせた。
私にとっての最高の死に場所は、エミリアを庇ったあの海底レリクスだった。それでも私は生き延びた。いや、生き返らされた。
きっとカミサマと言うヤツが私に天罰を与えたのだろう。ヒトである事を一度諦めて、ＳＥＥＤと言うバケモノになった事を言い訳に、実の両親すらも手に掛けた私に。
「理想的な死に方はさせない」と。

「もっと苦しんで生きろ」と。
エミリアはどうやらあのレリクスの一件を夢だと思っているらしい。
だからそれが、「夢」から「現実」に変わった時、きっと私の正体を知ると共に私から離れてしまうのだろう。
それは凄く悲しいし、凄く辛いし、凄く苦しいが、仕方の無い事だ。
ＳＥＥＤフォームと一緒に居たら、いつ汚染されるか分かった物じゃ無いんだから。
むしろ穢れの知らないあの子を犯してしまう前に、自分から離れた方が良いのかも知れないとすら思う。
でも。
でも、もう少しだけ。
もう少しだけ、この暖かい夢を見ていても・・・良いでしょう？

「エミリア～、そっちは終わったかしら～？」
「ま、まだ・・・ってうわぁ！？」
「エミリア！！」
エミリアがヴァーラの一撃を辛うじて避けると、少しみっともない体勢でヴァーラの前から逃げる。
追い討ちを掛けようとしているヴァーラの両腕の手首にあたる部分にフォトンの弾丸を撃ち込む。
痛みで悶えながらもこちらを向いたヴァーラの両目が次の瞬間にはフォトンの弾丸が突き刺さり節穴になる。
悲鳴を上げるべくして開けられた口に更にフォトンの弾丸を撃ち

込まれ、とうとうヴァーラは絶命する。
「う～ん・・・やっぱり２００メセタのレンタルブドゥキ・ハドじゃ精度悪いわね～・・・。」
「そのレンタルブドゥキ・ハドにも劣るあたしの戦力・・・やっぱあたしこの仕事向いてないんだよ・・・。」
精度の低い整備も悪いレンタルされたハンドガンのブドゥキ・ハドの照準を微調整していると、エミリアが誰が見ても分かるほど落ち込んでいる。
「でもみんな最初はそんな物よ～？　英雄イーサン・ウェーバーも同盟軍総司令官フルエン・カーツも最初は素人から始まってるんだから～。」
「異議あり！　キャストは最初から基本的な戦闘方法はインストールされてると思います！」
「あらあら～？　でもインストールされてる分だけじゃハウツー本読んだヒューマンや何かと変わらないのよ～？　現に我が家に乗り込んできたキャスト共だって～・・・」
そこまで言ってこれ以上はマズイと思い、止める。
「と、ともかく、最初はみんな素人なのよ～。諦めるのはもう少し頑張ってからにしましょう～？　それに危ない時は助けてあげるから～。ね？」
「う～・・・はぁ、分かったよ。もう少し頑張ってみる・・・。」
照準の調整を終えて、先へ進む。
ここは惑星パルムのラフォン草原。
生え茂る草に寝転びたくなるのは恐らく万人に共通する感覚のハズだ。勿論私も寝転びたいが、仕事で来ているのでそうも言ってられない。
今回の仕事はヴァーラの群れの討伐。何でも最近、この辺の農家が飼育しているコルトバがヴァーラの群れに執拗に狙われているらしい。
大した報酬は貰えない物の、危険はそこまで高くは無いのでエミ

リアの実力を見るには丁度良いと思い、この仕事を引き受けた。
エミリアは以前、クノーと言うヒトに戦闘の手解きを受けた事があるらしく、基本はちゃんと出来ていた。基本が出来ていれば本来ならそこまで苦戦する事も無いのだが。
「うげ！？」
エミリアは基礎的な体力がまるで無い。
エミリアの背に飛び付いているポルティの四肢の末端を撃ち抜いて剥がし、数回バウンドしてこちらに転がってきたダルマ状態のポルティの頭部を踏み潰して殺す。
その間にエミリアは正面に居る二匹の内片方を右手のセイバーで切り伏せ、もう片方を数歩下がってハンドガンによる射撃で仕留めていた。
たったそれだけでエミリアは肩で息をしている。戦闘の緊張と言うのも勿論あるのだろうが、それでもこれは致命的な気がする。
「・・・エミリア、帰ったら筋力トレーニングしましょう？」
「えー！」

無事にヴァーラの群れを殲滅した頃には、エミリアは大の字になってそこら辺中に血溜まりの出来た草原に寝転がって居た。
シールドラインのお陰で返り血を浴びてないのでエミリアから出た出血では無いとすぐに分かるが、服が赤いせいでヒトによっては即座に勘違いを起こすレベルで衝撃的な絵だ。
「もう・・・はぁ・・・もうムリ・・・動けないぃ・・・・・」
そう言って疲労を全身で表現しているエミリアの傍に行く。
「あらあら～。それじゃ、よっこいしょっと～。」
そう言ってエミリアを抱き上げる。思っていた以上に軽くて驚いたが、何よりいきなりお姫様抱っこされたエミリアはかなり困惑している様子だった。

しかしそれでもすぐに慣れたのか、異性では無いのであまり意識せずに済んだのか、直ぐに平静に戻っていた。
「それにしてもリアってほんと何者なの？　精度とか威力にぶつくさ文句言う割にはヴァーラ一体倒すまでにほんの二秒ぐらいしか経ってなかったし。って言うか、ハンドガン一丁であの数相手にあそこまで立ち回れる？　フツー。」
「エミリアだって沢山修羅場を潜り抜けていけばすぐにこれぐらいは出来るようになるわよ～？　あなたはとってもスジが良いもの～。同じ失敗は繰り返さないし～、覚えも良いし～。」
「そ、そう？　え、えへへ・・・なんか恥ずかしいな・・・。」
「でも基礎体力が低すぎるから、ちゃんと鍛えないといけないけどね～。」
「う・・・で、でもその辺もテクニックで・・・！」
「テクニックを使っても体力は使うわよ～？」
「むぐぐぐ・・・あ、そう言えばあんたってテクニック使わないよね？　何で？」
「理由は無いけれど、強いて言うなら銃が好きって事かしら～？」
「へ～・・・。」
それからも他愛ない話をしながら船の場所まで歩いて行った。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（後書き）

第一章、ようやくの終了です。
この後は多分、普通に第二章が始まります。
これからも大体一章三話ぐらいに纏めれたら幸せだなぁ・・・。
そうすれば大体、三十話目くらいでラストですからね。まぁ色々と脇にブレまくるんでしょうけどね！きっと！

追記：ライア総裁はリアの正体や経歴を知った上で親しくしています。その辺もその内書けたらいいな！

第四話（間）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

マクマホンじゃ無くてオクラホマミキサーじゃ無くて幕間ってなヤツです。あの、大体のアニメや漫画で一番内容が無くて笑える、あの辺りですね。

なるべくギャグっぽく仕上げようと頑張ったんですが、所詮は金属製の箱ッ！（キリッ）

ギャグセンスは流石の皆無ッ！！（キリッ）

無駄な努力だったッ！！！（キリッ）

第四話（間）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

「あら、意外と出来る子だったみたいね～？」

そう言いつつ、随分と綺麗になっている部屋を嘗め回すように見回しつつ、キッチリとベッドメイキングの施されたベッドに腰を掛ける。

と、同時にまるで魔法少女から露出度を引いて、聖職者の服装を足し合わせたような緑色の服に身を包み、服と同系色の長い帽子を被った、私のお尻ぐらいの背丈のお人形のような少女がトコトコと歩いて来た。

確か型番は『ＧＨ４４０』だったか。出発前に入力しておいた名前を呼ぶ。

「ただいま、メリー。ちゃんとお仕事できる子みたいでよかったわ～。」

「はい、お帰りなさいご主人。」

「ん～？」

「？　どうかした？」

「いえ、タメ口のパートナーマシナリーって随分と斬新なセッティングだと思っただけよ～。」

「ああ、それはきっとニーズってヤツだね。きっと居るものなんだよ、従順なメイドさんタイプより生意気な妹タイプの方が燃えれる人が。」

「ふ～ん？　あなた随分詳しいのね～？」

「まぁ、そう言うニーズに応える為に作られたタイプだからね。」

「へ～・・・ちなみに～、燃えるって何に燃えるのかしら～？」

「え、それは・・・。」

頬を赤く染めて目線を外す。その様子があまりに可愛くて、ついついイジワルしたくなってしまった。

「な・に・に・燃・え・る・の・？」
「え、え～と・・・その・・・」
「え～とじゃ分からないんだけど～？」
「う、うぅぅ・・・・」

顔どころか耳まで真っ赤になり、もう涙目になってしまい、帽子を引っ張って目元まで隠してしまっている。
流石にこれ以上はかわいそうだと思い、後頭部のあたりにそっと手を添えて撫でるようにしながら、

「うふふ、大丈夫よ～、ちゃぁんと分かってるからね～。それに私、機械にそう言う事を求めるつもりも毛頭無いから安心してね～。」
「あうう・・・酷いよぉ・・・。」
「あらあら、一応同性なのだけど～？　あなたってむしろそっちの方がって子なのかしら～？」
「ち、違うよ！　そうじゃ無くて！　・・・んもう、ご主人のイジワル！」

そう言ってベッドのある場所から離れて、キッチンへと逃げるように走って行く。
それを笑って見送ってからバスルームに行き、シャワーを浴びて寝巻きに着替えて床に着く。

その晩、私の眼帯として巻いているタオルを取ろうとした誰かの腕を捕まえる。嫌に細い腕だった。

「誰？」

「あ、あの、ボクだよ！　メリーだよ！」

「ああ、メリー。」

そう言って掴んだ細い腕を放してやる。上半身を起こし、私の隣に座るようにしているメリーを見下ろす。後でメリーから聞いた話なのだが、その時の私の目付きはまるで、『お預けをくらった猛獣のような眼』だったらしい。

「メリー？」

「は、はい！」

「あなた、少し生意気に設定されてるらしいけれど、世の中には生意気や悪戯で済む事と済まない事があるって、わかってるのかしら？」

「え、ええ、まぁ・・・。」

「・・・良い？　『私から絶対に眼帯またはそれに準ずる物を取らない事』。分かった？」

「は、はい！　分かりました！」

「うん、分かれば良いのよ～、分かれば～。」

そう言ってメリーの頭をポンポンと軽く叩いてから布団を持ち上げて自分の体に乗せ、眠りにつこうとする。その時、ぼそりと一言付け加えておく。

「もし破ったら、起動状態でスクラップにするから。」

「は、はいぃ！　心得ましたぁ！！」

「フッ・・・まだまだだね、エミリア。」
「むぐぐぐ・・・ちょっとリア！　なんなのよこの生意気この上ないパートナーマシナリーは！！」
「あらあら～。」

今日も今日とて、パルムのラフォン草原。今度は突然変異の原生生物を捕獲して欲しいとのお達しだった。名前は・・・失念した。依頼主はイン・・・なんとか社って大企業だったと思う。
何でも、色々な研究に使うらしいのだが。しかし、強引に実験台にされた経験のある私としては若干抵抗のある仕事だったりする。とは言え、仕事は仕事。
報酬はかなりしょっぱかったような気がするが、それ位の報酬し

か出ないような危険度の低い依頼の方が、エミリアの訓練には丁度良いだろう。
まぁ、今回はいつの間にやらシップの中のコンテナに潜んでいたメリーが付いて来てしまっているのだが。

「セイバー系統の武器を持っておきながらダガー系統の武器を扱うようなド至近距離まで近付くなんて・・・ホント、ハウツー本を読んだだけって感じだね。」
「だってしょうがないじゃん！あたし最近まで戦ったことなんてなかったんだし！」
「ボクだって最近起動したばっかりだよ？そんなボクにも劣るなんて・・・まったく、本当に駄目だなぁ。」
「うぐぐぐ・・・もう！　リアも何か言ってよ！」
「あらあら～。」
「そこ！誤魔化さない！！」
「ん～っと～・・・。」

正直、メリーの言っている事は吐き気を催す程度には正論だ。故に、真正面から言い返すのは難しい。なので、今回は揚げ足を取る方を選ぼう。

「メリー、ちょっと言い方が悪いわよ～？　あと、貴女も人の事言えない程度には槍を振る間合いが近いんじゃ無いかしら～？　折角の長い得物なのに、そのリーチが生かせてないわよ～？」
「え、うん・・・でも、エミリアにはこれ位言わないとって思ったんだけど。」
「いいえ～、エミリアはアレで結構飲み込みが早いんだから～。そんなに罵詈雑言織り交ぜなくても分かってくれるわよ～？」
「う～ん・・・分かった、今度から気を付ける。」
「うん、素直でよろしい～♪」

目線を少しずらし、エミリアへと向ける。少し離れた場所で、エミリアがその場で軽く素振りをしている所だった。
と、その奥で干し草にも似た、褪せた黄緑色の巨体が動いているのが見えた。全身は硬そうな外殻で覆われているらしく、手足が合計で四本しか無い所を除けば昆虫が最も近い分類に見える。
その両腕と頭部は胴体や足に比べると明らかにオーバーサイズであり、両腕の先には大きく、金属光沢のある爪が生えていた。
しかしその爪自体は特別尖っているワケでは無く、むしろそれはメリケンサックの様な用途を感じさせる物だった。

「エミリア、ちょっと静かに。」
「へ？」
「奥にあの・・・ア・・・アス・・・え～と・・・なんだっけ～？」
「アスターク。まったく、何でブリーフィング受けてないボクが分かって、まともにブリーフィングを受けたハズのご主人が分かんないんだ？」
「あらあら～。うん、そのアメトーク」
「アスターク。何で面白い回とつまらない回が半々の深夜番組と間違えるの。」
「そのアカツキ」
「アスターク。金ぴかロボでも忍者の秘密結社でも無いから。」
「そのアレイスター」
「アスターク。どうして二十世紀最大の魔術師の名前が出てきたの？」
「そのモハメッド・アリ」
「アスターク！！！どうすれば伝説のボクサーと間違えるの！？それに『ア』しか合って無い上にその『ア』も中途半端な所だよね！？もうご主人、いい加減にしないとホントに怒るよ！！？」
「そんなに怒鳴るから～。ホラね～？」

そう言ってアゴで斜め上の方を指す。と、そこには先ほどまで遠くに居たハズの巨体が、右腕を大きく振りかぶったポーズで上から降って来る所だった。
エミリアは飛び上がったタイミングに合わせてしゃがみ込む事で回避し、メリーは慌てて真後ろに跳んで逃げる。
私はどう動いても今からだと間に合わない。
アスカラングレーじゃ無くてなんだっけ？が目の前まで迫る。
私は咄嗟に膝を折ってその場に崩れるようにして仰向けになるように背中から倒れこみ、ポケットから強烈な睡眠薬が入ったアンプルを右手で取り出す。
アサシングリードが私の頭の上数ミリの所に腕を落着させると同時に、そのままディープキスが出来そうなほど顔に近いアジアンカンフージェネレーションのアゴと思しき部位の下の奥の方、平たく言えば首の血管が通ってそうな辺りに右手に握っていたアンプルを手が埋もれるほど深くに差し込み、中身を挿入する。
すると突然、力が抜けたかのようにガクッと頭が前に落ち込み、

「〜〜〜！！！！！」

本当にディープキスするハメになってしまった。

「アッサラームアレイクム・・・恐ろしい相手だったわ〜・・・。」

「ま、まぁまぁ！別にファーストキスとかじゃ無いんでしょ？　ホラ、そんなに気を落とさないで！」
「と言うかアスタークだってばご主人。アラビア語で挨拶してどうするつもりなのさ。それにしても何と言うか、張り合いの無い仕事だったね。」
「あぁ、それならワケがあるそうよ～。」
「ワケ？」
「ええ、何でも、複数の軍事会社や傭兵に依頼を回したらしくって～。それで～、１０のグループで一匹ずつ、合計１０匹捕まえるって計算らしいわよ～。」
「なるほど、つまりその１０のグループで報酬が等分されて、そのせいで異常にしょっぱい金額しか報酬が貰えなかったってわけね。」
「ええ～、そう言うこと～。で～、ウチが一番速かったらしいわよ～。報告入れる時に驚かれちゃったわ～。」
「ふ～ん。ま、ボクとしてはどうでもいい事だけどね。」
「あら薄情ね～。」
「う～ん・・・あたしとしてはもうちょこ～っとだけ、練習したかったかなぁ・・・。」
「あらあら～？じゃ、やって行く～？特別メニュ～♪」
「う、遠慮しとく・・・さ！とっとと帰ろう。帰って運動した分何か食べたいし！」
「ボクも早く家に戻ってお風呂に入りたいな。」
「あら～、じゃ、早上がりさせて貰いましょうか～？」
「「おー！」」

第四話（間）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

本編と関係があるような無いような？そんな第四話でございましてございましたですよ！　さてさて、次から第二章に入って行く形になると思いますですだよ！　ってなワケで、次回までしばしお待ちを～！ではでは～！

あ、ちなみにこのパートナーマシナリーの話は雑炊さんのを読んで感化された結果です。勝手にパクってスイマセンでしたぁ！！

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（前書き）

何でこんなに次話投稿が早かったのかって?！　それぁあんた、事前にこの辺りまで書いてあったからに決まってっしょ！　ってなワケで、本編第二章、始まり始まりでございますー！

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」

まるで揺れの無い快適極まりない船をわざわざ手動航行モードで、しかもわざわざワープゲートを通らないルートで悠々と航行して行く。

行き先はクラッド６のリトルウィング社用船用船着場だ。鼻歌交じりに飛ばしている私の肩をエミリアが叩く。

「ねぇ、ちょっと良い？」

「ん～？　何かしら～？」

「何でわざわざ手動で、しかもワープゲート使わないルートで行ってるの？　経費と時間の無駄じゃない？」

「あらあら～。でもね、エミリア。さっき見た入ってるお仕事の中には急ぎのお仕事は一つも無かったもの～。時間は少し無駄に使うぐらいが丁度良いのよ～？」

「いや、でも結局燃料は無駄使いしてんでしょ？　そう言うのでイチイチおっさんにどやされるのイヤなんだけど。」

「大丈夫よ～。無駄使いしたのは私だもの、どやされるのはきっと私だけよ～。」

「いや、だからぁ・・・あ、通信だ。」

そう言って少し強引に話を切り上げてエミリアがコックピットフロアの中央にセッティングされている仕事の受付を行ったり会社からの通信を受ける「スゴイビジフォン」の方へ行き、掛かって来た通信を受ける。発信先の名前を見た時、露骨にエミリアの表情が曇る。まるで職員室に呼び出されてイヤイヤながらに入る子供のような顔で回線を開き、通信を始める。

向こうが色々とやかましく言い続けているのか、エミリアは

「・・・・はい・・・・・・はい・・・・・。」

と言って答えるばかりで、、明らかに表情もテンションも沈んで行く。

「えぇと、本人は今月のツケは払ったって言ってたんですけど・・・はい・・・分かりました、本人にそう伝えます・・・。」

そう言って通信を切り、エミリアが海溝を思わせる程に深く重い溜め息を吐く。

「今の誰宛〜？」

「おっさん宛。ちなみに今のは家からの転送通信。ついでに相手はおっさんの行きつけの飲み屋。おっさんさぁ、あたしには働けーって言うけど自分は昼間っからお酒飲んでばっかだし、飲み屋はツケで飲んでくるし・・・バリバリ働いてとは言わないけど、人並みにはちゃんとして欲しいよね。アレでも一応あたしの保護者なんだし。」

「確かにそうね〜。ツケ払いは良くないわね〜。まぁ私も食い逃げの一つや二つや三つする事もあるけどね〜。」

「いやいやいや、食い逃げの方がマズイでしょ！？」

「後で払いに行けば良いかな〜って思って〜。」

「そんなワケ無いでしょうが！？」

「でもツケ払いってそう言う事じゃ無いのかしら〜？」

「むむむむ・・・はあ、ともかくあたしはこの事をさっさとおっさんに伝えたいから、ちょっとだけ急いでくれない？」

「はいは〜い。」

そう適当に答えてターボロケットに点火して急加速をしたら、エミリアが盛大に転んだ。

そして椅子に寄りかかって眠っていたメリーは、コテッと転んだがそれでも寝続けていた。

どうやら急激な加速や急速に変わる重力方向に耐えられなかったらしく、エミリアが気分を悪くしたので、クラッド6に着いてから十分ほど小休止を取ってからリトルウィングへと向う。

歩いてる最中もエミリアは何処かおぼつかない足取りで、あっちへフラフラこっちへフラフラ、生垣に突っ込んだりもしていた。

少し面白いが流石に可愛そうなので、エミリアを支えながら事務所へと入って行く。

事務所では丁度昼休憩の時間なのか、チェルシーが電脳エネルギー補給用ゼリー（ライチ味）を吸いながら、テレビに釘付けになっていた。

流れているのはニュースらしく、グラールチャンネル5の新人リポーターの紫色のツインテールが少しリズミカルに画面の中で揺れていた。

「着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した総合科学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シュウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいものですね。

今日のグラールチャンネル5ヘッドラインニュースはここまで！

ニュースキャスターはハルでした！　バイバ～イ！」

ニュースが終わる。と、画面で流れるスポーツニュースの特ダネらしい、ユニバースボール出場選手達をチュエルシーが睨みながら、何故か怒声を上げる。

「ノー！　ニュースそれで終わりナノ？　納得いかないヨー！」
「なんでいきなり怒ってるの、チェルシー？」
「今のニュース、スカイクラッド社が出てないネ！！　亜空間航行の計画に、イッパイ出資してるんだヨ！　ウチの良い宣伝になると思ったのニー！」
「あらあら～。」

しかし多額の出資をしているのは何もスカイクラッド社だけでは無いように思える。何せ、ほぼ確実にお金になる亜空間研究。
誰が一番お金を出したかによってどの程度の権利を得られるか等が決まってくると考えると、裸一貫になろうとも亜空間研究に出資したくもなるものだ。
つまり、ある意味ではたった今このグラールで財政の実権を握っているのはこのイン・・・えぇと、インヘルト社であると言っても過言では無いかも知れない。
それを鑑みるに、この出資ダービーで一番が何処なのかを伏せるべく、出資した企業の名前を一切出さないと言うのは、ある意味では正しい判断とも言えるかも知れない。
もっとも、これらは全て単なる想像でしかないのだが。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって。」
「あら、でも風が吹けば桶屋が儲かるのよ～？　少しでもスカイクラッドの知名度が上がって～、波風立った方が～、リトルウィング

の利益にも繋がると思うんだけれど～？」
「そう言われると何かそんな気もして来るけど・・・そんなことよりチェルシー。おっさん、いる？」
「あ、そういえば、シャッチョサンが二人に用があるって言ってたネ。ニュース見ててすっかり忘れてたヨ。」
「ま、いいけど・・・奥におっさん、いるんだよね？」
「シャッチョサンのトコ行くなら、ついでにアレもお願いネ。チョット、待っててネ。」

そう言ってチェルシーはイスをスイーッと滑らせて移動し、自分のデスクまで戻ると、そこで一枚のメモのような物を手に取り、またスイーッとこちらへと戻って来てエミリアにそのメモを渡す。

「ランジェリースポット、リッチベルベット。ダグオラシティ店・・・・・ねぇ、このいかがわしい～領収書は、何？」
「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨって伝えてネ！」

エミリアの額に縦に筋が立って行く。どうやら大分トサカに来たようだ。

「あのエロオヤジ・・・！　ツケの払い忘れのみならず、経費の無駄遣いまでするか！」

な～んだ、クラウチさんもしてるんじゃない、経費の無駄遣い。私は、ふふんと鼻を鳴らして少し胸を張ってエミリアに少し得意げに、

「ほらエミリア～、私の燃料の無駄遣いなんてまだまだ生温い物でしょ～？」
「でも金額だけなら燃料の方が高い気がするけど。最近、値段高等

してるからね～、航空燃料って。無駄に噴かした航空燃料に、更に無駄に噴かしたターボロケットの燃料代を合わせたら、これの１．３倍ぐらいになりそうだし。」

「うぐ・・・し、資源枯渇問題、早くどうにかならないかしらね～・・・。」

まさかのカウンター。これには流石に面食らった。と、そんなやり取りを見ていたチェルシーが、時計を見て少しハッとすると共に、手を叩きつつ私達に声を掛ける。

「ハイ、モウお昼休み終わっちゃうカラネ！　文句は奥でネ！」

「ちょっとおっさん！　・・・ってうわ、酒臭っ！」
「ホント・・・まるでお酒を撒いたみたいに強烈ね～・・・・。」

到着早々、エミリアが思い切り顔をしかめる。

「よぉ、来たか。」
「来たか～、じゃ無いっての！　いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ！　いいかげんツケを払って欲しい、って！」

それから先ほどチェルシーに渡された領収書を、クラウチに突き付けるようにして見せる。

「それに、これ！」
「あぁん？　こりゃ資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもってんだ？」
「こんないかがわしいものが経費で落ちるわけがないでしょ！　常識で考えろ、常識で！」
「あぁ？　バカ、わかってねーな。こういう根回しも必要なんだよ。」
「どういう根回しですか～・・・？　・・・モトゥブの有力なローグスが経営してるとかなら分からなくもないですけど～・・・。」
「お、良く分かってんじゃねえか。」
「えぇ～！？」

正直、ほとんど冗談だった。そもそもモトゥブのローグスが水商売の店を経営しているとは思っていなかったし、しかもダグオラシティみたいに大きな街に店を堂々と置いているなんて。
いや、それより確かにこう言うちょっと悪い事もしなくちゃいけないような仕事とは言え、本当にローグスと関係を持っているとは。

やはりビースト、横の繋がりが侮れない。

「まぁいい、それよりも仕事の話だ。」

そう言うと、クラウチさんは画面に映る水着の女性を幾つか最小化して、幾つかの写真や資料を大きくして見えるようにする。

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見付けてきてやったぞ。こいつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「人の捜索・・・？　何かの重要参考人とか、要人とか？」

「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまるところ、借金の取立てだ。」

「依頼主おっさんじゃん！　そんなの自分で探しに行け！」

「そうですよ～。私達は使いっぱしりじゃ無いんですから～。」

「やかましい！　どっかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事ポカったからロクな依頼がこねぇんだよ！」

「う・・・それを言われると・・・」

「ちょっと・・・言い返し辛いわね～・・・あ、でもポカしたの私じゃ無いですね～。」

「んじゃぁエミリアだけに行かせるか？」

「それは～・・・ちょっと～・・・。」

「ちょ！？　むしろその反応の方が傷つくんだけど！？」

「コラ、ここで言い合ってても仕方がねぇだろ。さっさと話進めんぞ。」

これ以上脱線すると修復不可能だと判断したのか、そう言って無理やり話を切り替えるクラウチさん。なるほど、この人はこうやってのらりくらりとかわすのか。

「捜索対象者の名は「ワレリー・ココフ」。５１歳、男性・・・種

族はビーストだ。ワレリーの船は、モトゥブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく・・・とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。」
「どうやって船の場所を特定したんですか～？」
「ワレリーの嫁がアイツの船に発信機を仕込んでるんだと。で、訪ねて行ったら、取立てなら場所教えるからアイツに直にやれって、何故か怒鳴られちまった。まそんなワケで、アイツの船の場所が分かるんだ。分かったか？」
「ええ～、一応～。」
「場所まで分かってるんなら、なおさら自分で行けば良いじゃん・・・。」
「何か言ったかごくつぶし？」
「なんでもないですー！」

そう言うと共にエミリアが踵を返すと、私の袖を引っ張って、

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもないのに酔っちゃう！　さ、いこいこ！」

と言う。まぁ確かにもうそろそろこの場を離れたかったのは事実だ。なんせ本当にお酒の匂いがキツイ。エミリアに袖を引っ張られるままにその場を後にする。

船の中でぐっすり眠っていたメリーを部屋まで運び、ベッドの上に置いて部屋を出る。
部屋を出て真っ先に向うのはウェポンショップ。２００メセタで借りていたブドゥキ・ハドを返却し、新品の『ブドゥキ・パム』を購入する。セットでダガータイプの武器を買うと割り引かれるそうなので、少し出費がかさむのが気になったが、とりあえず購入する事にした。
ＧＲＭ社製のロングラン商品、その名もズバリ『ナイフ』。
テノラの製品は確かに頑丈で、大出力なフォトンジェネレーターを搭載しているので威力も見込めるが、いかんせんバランスが悪い。
銃火器も、確かにバランスも大事だが、こと刃物に関しては特に重さのバランスが重要になって来る。銃火器での戦闘の際、百発百中がやはり最高だが、そう言うワケにも行かない。正直な所、百発中七十発が当たれば十分に生き延びる事が可能だ。しかし、刃物を用いた近接戦闘ではそうも言ってられない。
一太刀読み違えればその時点で胴と首が離れかねないし、一瞬遅かっただけで心臓を貫かれかねない。
まぁ私はその程度では死なないのだが、それは横に置いておこう。
軽量かつ高い次元でバランスの取れた素晴らしい武器と言えばヨウメイ社だが、それはフォトンジェネレーターの出力を犠牲にした上で成り立っているワケであり、やはり威力の不足が目に付く。そ

れにデザインもあまり好きじゃない。
それらを統合した上で、やはり最高の妥協点としてバランスの取れた良い製品を提供しているのがＧＲＭ社だ。まぁ、ＧＲＭタイマー等と呼ばれる故障の多さが目に付くが。
流石に新品でそれは無いハズなので、今回の仕事分は持ってくれるだろう。

・・・まぁ、今回の仕事は実入りの無い仕事なので、次の仕事分も持ってくれないと困るのだが。

船に戻ると、エミリアがいつも首に掛けているヘッドフォンを珍しく耳に着けて曲に聞き入っていた。

足音を立てないように注意しながら近付き、後ろからギリギリ視界に入らないぐらいの所まで耳を近付ける。僅かに聞こえて来た曲は、

「・・・I don't want this moment to ever end・・・Where everything nothing without you・・・I want you to know!!」

「わぁ!?」

「あらあら～、驚かせちゃったかしら～？　それにしてもエミリア、『With Me』なんて聞いてるなんて～。人は見かけに寄らない物ね～？」

「良いじゃん別に！　それに、いつもはもっと別の曲も聴いてるし！」

「あら～、悪い～なんて言ってないのよ～？」

エミリアが少し慌てたような手付きでヘッドフォンを頭から下ろして首に掛け、音楽プレイヤーのスイッチを切る。それから座席のシートベルトをキチッと締める。

「さ、どうぞ。行くんでしょ？」

「あらあら～。曲を聴きながらでも良いのよ～？」

「そりゃあたしだって聴いてたいけどさ・・・だってあんたの操縦荒っぽ過ぎるんだもん。曲に集中出来ないって。」

「ん～、でも今回は素直にワープゲートを使おうと思ってるから～、多分大丈夫だと思うわよ～？」

「え、そう？　じゃ、大丈夫かな。」

そう言ってヘッドフォンを耳に被せるエミリア。音楽プレイヤーを取り出し、操作していると、何かを思い付いたように手を止めて、

私の方を向く。

「ねぇねぇ！　なんだったらさ、船内スピーカーで流そっか？　あんたも好きでしょ？」

「あら～、それは名案ね～。じゃ、お願いしようかしら～？」

「うん！任せてよ！」

そう言うと共にヘッドフォンを再び首に掛け直し、席を立って船内スピーカーに繋がる端末を弄り始める。私はコックピットに座ると、揺れないように注意しながら船を発進させる。

ほとんどオートでモトゥブ行きのワープゲートの前まで着いた辺りで、船内スピーカーからノリの良い、割と激しい数世代前の曲が流れ始める。

「じゃ、行くわよ～。ちゃんとシートベルト締めておいてね～。」

「うん！」

「へー・・・おっさんはへんぴな場所って言ってたけど、その割りに観光プラント並に船が多いじゃん。」
「そうね～、自然観察～とかハイキング～とかが静かにブームなのかしらね～。」
「それは無いと思うけど・・・ってかさぁ、何であたしらがおっさんの貸したものの取立てなんかいけないワケ？　はぁ、経費だけじゃなくて以来まで私物化し始めてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言ってくれないかなぁ・・・。」
「ガツンと、ね～・・・。私が言いましょうか～？　正直、上司がアレだと働く気力も湧かないし～。」
「言っても良いけど、多分無駄だと思うよ？　あたしも言った事あるけど、全然話聞いてくれなかったし。あ、いや、でもあれはあたしだから、かな・・・」

エミリアが少し暗い顔をして俯き、呟く。

「どうすればあたしの話を聞いてくれるようになるのかなぁ・・・。」
「ん～、そうね～・・・うん、取り合えず、依頼を遂行しましょう。」
「えー？　そんな事であのおっさんが態度変えると思う？」
「少しずつ依頼を遂行して行けばその内、話も聞いてくれるようになると思うわよ～？　でも、焦りは禁物よ～？『信頼と言う木は育つのが遅い木である』って言葉があるぐらいだもの～。」

「信頼、かぁ・・・でもなぁ・・・正直、この仕事って結構キツイし、あんまり向いてないような気がするし・・・だってホラ、さっきだってあんたのパートナーマシナリーに・・・」
「おいお前達！ここで何してる！」

その声に驚いて辺りを見渡す。が、中々声の主が見当たらない。確かに少し高めの男性っぽい声だったハズだ。声からして身長１６５は超えていそうなのだが、まるで見付からない。

「どっち見てんだよ！こっちだこっち！」

そう言われて真後ろの下の方を見る。と、そこにはまるで子供のような背丈しか無いビーストの男性が立っていた。肌は黒く、目が青く、髪はオレンジ色で逆立っている。
その目付きや物腰から、これは子供では無く大人の小ビーストだと当たりを付けたが、正直言って小ビーストなんて初めて見た。

「あ、あら～？　あらあら～、もしかして小ビーストの方ですか～？」
「そうだよ、見りゃわかんだろ・・・で？お前らここで一体何してるんだ？」
「あたし達、人を探してるんです。」
「人探し？」
「トニオー！こっちは駄目だよ、人っ子一人居ない。そっちは・・・ああ、二人見付けたんだ。」

そう言ってもう一人、こちらもまた非常に背丈の低いビーストの女性が現れた。こちらも歩き方などから察するにほぼ間違い無く大人の小ビーストなのだろう。

「いや、こいつ等は今来たばっかの同業者らしい。」
「あ、そうなんだ。」
「えぇと～、あなた方はここで何を～？」

その質問に対して、トニオと呼ばれた男性の方の小ビーストが、
「おっといけね」と言った事を小声で言って、

「その質問に答える前に、自己紹介をさせてくれ。俺はトニオ・リマ。んで、こっちは・・・」
「あたいはリィナ・リマ。あたい達、夫婦で傭兵をやってるんだ。」
「あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。んで、こっちはあたしのパートナーの・・・」
「リア・ゲートです～。私達はリトルウィングと言う軍事会社の社員でして～、お仕事で人を探しているんです～。あなた方も人探しか何かですか～？」
「ん、俺達はこの文化保護地区を見回るように言われて来てるんだ。」
「文化保護地区？」

エミリアが首を傾げて聞く。と、言うのも無理は無いだろう。なんせ辺り一体は単なる密林にしか見えない。自然保護区ならまだしも、周辺には文化的な物は一切見当たらないのだ。それを文化保護区と呼ばれても、イマイチピンと来ない。

「・・・この、密林が、ですか～？」
「・・・・・・お前達、そんな事も知らないでここに来たのか？」

トニオがもの凄く深い溜め息を吐く。本当にお前らは教育を受けてきたのか？とか、お前ら実際何歳だよ？とか、何で説明しなきゃなんねぇんだ？とか、そう言う心の声が聞こえてくるぐらいに深い

溜め息だった。その溜め息を聞いて、エミリアが少し頬を膨らます。
「駆け出しだから仕方ないんですー！　ん～、でも文化保護地区とかある観光地にしては誰もいないって言うのは不思議だね。船はこんなにいっぱいあるのに・・・。」

そのエミリアの意見を聞いたトニオが、少しニヤリと笑う。

「なるほど、勘は良いみたいだな。」
「さっきあたいが出くわした原生生物もやけに凶暴だったし、多分、奥で何か起こってるんじゃないかな。」
「う～ん、だとすると、奥の方に探している人も居るかも知れませんね～。」
「なんにせよ、奥に進まなけりゃ見回りも人探しもできねぇしな。」
「え、もしかしてそれ、奥に行く流れ？」
「ええ～。まぁ、さっきちょこ～っと物足りなかったんでしょう～？なら丁度良いんじゃないかしら～？」
「えー・・・取立てなら戦わなくて済むと思ったのにー・・・。」
「なら～、一人でお留守番する～？」
「それは寂しいからイヤ！」
「と、言うワケで～、私達は奥へ行きますので～。それでは～。」
「おいおい、ちょっと待てよ！」

そう言ってトニオが奥へと行こうとした私達を呼び止める。

「どうせ同じ奥に行くんだ、一緒に行かねぇか？」
「あ、それもそうですね～。それでは、よろしくお願い致します～。」
「うん、よろしくね。それじゃ、取り合えずカーシュ族の村に向うって事で、良いかい？」

「ええ、お任せします～。船を置いて何処に行ったのか分からない以上、それで問題ないですよ～。」
「村？　その村までの道のりとかって分かるの？」
「うん。カーシュ族は各地を転々とする部族なんだ。だからはぐれた仲間が分かるように、文字で目印を残してるんだ。で、その文字をあたいはあらかじめ学んできたから読めて、それを辿れば村まで行けるってワケさ。」
「へ～・・・どんなのなんだろ。」

エミリアがカーシュ族の文字に若干の興味を惹かれたところで、一向は歩き出す。目的地は取り合えず、カーシュ族の村だ。

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（後書き）

へい、反省してます。でもだってこの話にかなりピッタンコだったんだもん！　と、言う訳で、是非とも聞いてみてください。『ＳＵＭ４１』の『Ｗｉｔｈ　Ｍｅ』です。ＳＵＭ４１っぽく無いだとか商業用曲だとか色々と意見御座いますが、わっちは好きですよ～、こう言うのも。てな具合で今回はここまで。ただ、次回は何時になるかちょ～っと分からないので、直ぐに来ると思わずに、気長に待っていてくださいまし～。ではでは～。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」

「へー、これがカーシュ族の文字なんだ！なんだか面白い形してるね！」

どうやら初めて見るカーシュ族の文字が気に入ったようで、一番前に出て解読をしているリィナの後ろから覗き込むようにして文字を見ている。

「ん～、面白い形って言うのは～・・・ちょっと分からないわね～。それで、何て書いてあるんですか～？」

「え～っと・・・ここからの大雑把な方角しか書いてないみたいだね。『日の沈む方角』って書いてあるから、多分、西の方角だろうね。」

「西か。って事は、あっちの方になるな。よし、行くぞ。」

「あ、ちょっと待って！面白いからもうちょっと見てたいんだけど・・・」

「置いて行くわよ～？」

「あぁんもう！」

本当に置いて行く勢いで少しだけ速く足を動かすと、エミリアが小走りで追いついて来た。追いついて来たエミリアの方に振り向くと、原生生物が遠くからこちらを見ているのが見えた。

「トニオさん、もう武器を出しておいた方が良いかも知れません～。」

「ん、そうだな・・・出てからでも遅くは無いだろうが、まぁ確かに備えておいた方が良いだろうしな。」

そう答えると共に、トニオがクロータイプの武器を右手に装備する。私も先ほど購入したナイフとブドゥキ・パムを手に持ち、何時でも戦える状態にしておく。リィナもダガータイプの武器を装備し、エミリアも釣られるようにしていつも使っている特異な形状の長杖を手に持つ。

「あら～？　結局、それにしたのね～？」
「いや、セイバー系を諦めた訳じゃないよ？　ただ、皆の装備を見ると、コッチの方がバランス良いかな～って。」
「あらあら～。そんな事を考えれるなんて、随分と成長したのね～♪よしよし～♪」

そう言ってブドゥキ・パムを持つ左手でエミリアの頭をぐりぐりと撫でる。

「い、痛い痛い！グリップがゴリゴリして痛いって！」
「あらあら～。」

そう言ってパッとエミリアの頭から手を離す。と、同時に前からこちらに切り掛かるトニオからの一撃を、真後ろに反る事で避ける。
どうやら、真後ろから大型昆虫のような空を飛ぶ原生生物が突進をして来ていた所だったらしい。その原生生物の、コックピットのような複眼に、トニオの爪が深く刺し込まれて、
中から緑色の液体が勢い良く噴出し、

「～～！」

私に思い切り掛かる。シールドラインのお陰で液体は直ぐに体から流れ落ちたが、それでも正直、気分の良い物では無かった。

大分進んだ所にある、少し開けた場所。
先ほどの腹いせに少々派手にやり過ぎてしまったかも知れない。
辺りには大小様々、種類も豊富な肉片の数々が散乱し、緑や赤と言った血液的な体液がそこら中で入り乱れて競うようにして水溜りを作っている。
今足をあてがっているのは、ギリギリで生きているヴァンダの心臓。皮膚や骨格だけをナイフで削ぎ落として、心臓に直に足を当てている状態だ。
どくんどくんと言う動きが、未だ生命活動を続けていると私に訴

えかけて来ている。その感触が心地良く、このまま止まるまでこうしていようかとも考えたが、トニオとリィナ、それとエミリアが先を急ごうと言うので、仕方なく心臓を踏み潰した。
その感触は水風船を踏み潰した感触よりも生魚の塊を踏み付けた感触に似ていて、プチッというよりもグジョッとした感触が靴越しに足の裏に伝わってきた。

「お前、割とエグイ殺し方するよな。」

そうトニオに言われて、歩みを進めながらも自分の行いを振り返ってみる。
例えば、あの巨大な羽虫。アレは先に羽の付け根と体液を発射してくる銃口をハンドガンで撃ち抜いて地面に落としてからナイフで恐らく急所であろう場所を上から押し切る。
例えば、あの巨大な花。アレは口からテクニック（？）を撃ち出してくるので、その照準がズレるように弾丸を花弁の付け根辺りに刺し込んでいる。その内、勝手に耐えられなくなって、勝手に自爆する。

「そうですか～？　実戦で威力の低い武器を扱って戦うなら、こう言った相手の動きを抑制する攻撃の方が効果的だとおもうんですけど～？」
「ああ、確かにそうだ。でもよ、さっきの心臓を直に踏み潰すのは実戦的とは言えねぇんじゃねぇか？」
「あれは・・・確かにそうでしたね～。」

確かに、アレだけは少々やりすぎた感があった。とはいえ、フラストレーションがあの心臓の動きに合わせてとろけていく、あの感覚。あれはきっと誰だって病みつきになる筈だ。
あの何とも言えない、相手の命を完全に手の内に納めた感触。トニ

オにもリィナにも是非ともやってみて貰いたい。エミリアには少し早いかも知れないが。
そんな事を考えていたら、どうやら少々下品な顔になっていたらしく、エミリアに不安そうな目で見られる。

「リア・・・あんたさっきからニヤニヤしてるけど、大丈夫？」
「え、ええ大丈夫よエミリア～。・・・あ、アレってカーシュ族の目印じゃないかしら～？」

そう言って話題を反らす。先ほどから幾つか見てきたので、何となく『ソレっぽい』物の見分けが付くようにはなっていた。
四人でその目印っぽい物に近付いて行く。それはどうやら新しい物のようで、先ほどの風化しかけの文字列とは明らかに違って見えた。
何より、先ほどまでの物よりも明らかに長い。意味不明の言語だったとしても、それが長い文章なのか短い短文なのかぐらいは見分けれるように、その程度は分かった。
無論、読めるハズは無いのだが。
リィナがまず解読を始めるが、それまでよりも難しい文法を用いているらしく、口の中で「ん～と・・・」や「えぇと・・・」と言って中々解読が進まないらしかった。

「あ、なるほど。これが最後の目印みたいだね。」
「え？」
「ん？」
「あら～？」
「ふむふむ、なるほど・・・良かった、そんなに遠くは無いみたい。」

リィナより先に、エミリアが解読してしまった。トニオとリィナと揃って口をポカンと開けてエミリアを見詰める。と、まず先陣を

切ってエミリアに疑問をぶつけたのはトニオだった。

「お前・・・読めるのか？」

「え、だってさっきからリィナの後ろから見てたし。」

「だとしても～、随分と理解するのが早いのね～？」

「いや、分かるでしょ普通？　だって文法自体はそこまで難しくないし、類似の文字は大体同じ意味が多いし・・・」

「えぇと・・・少なくとも、あたいが読めるようになるまでは一月ぐらいは勉強したんだけど？」

「え・・・えぇと・・・。」

大人三人（内二人は小さいが）に詰め寄られてしどろもどろし始めるエミリア。余りにも反応が可愛いので更にプレッシャーを掛けようかとも思ったが、エミリアが話題を終了させるべく手を振りながらそっぽを向く。

「と、ともかく！道はもう分かるんだし、早く行こうよ！」

そう言って歩き出すエミリア。と、その時だった。

「お前、止まれ！」

そう声が聞こえると共に、森の奥、エミリアがまさに今足を向けた方向からフォトン製の矢がエミリアの方へと飛来する。私はエミリアの重心が乗っている左足の踵辺りを、低出力なスタンモードに切り替えたハンドガンで撃ち抜き、遠距離から強引な足払いをしてエミリアの体勢を崩す。

矢は真後ろに反るようにして倒れこんだエミリアのギリギリ真上を通過し、私の方にまで飛んで来る。それを右手のナイフで受けて威力を減殺する。

私がエミリアを倒して矢を受けるまでの一連の動作の内にトニオは右手にクローを持ち、矢を放った人に迫る。リィナも両手にツインハンドガンを持ち、トニオの斜め後ろに付く。

そしてトニオが飛び掛り、クローで切り付けようとしたその時だった。矢を放った人・・・派手な民族衣装を身に纏った、端整な顔立ちの少年が真上に手をかざす。それと共に後方から赤い何かが魔方陣のような物と共に召喚され、その赤い物が放った炎の塊がトニオに迫る。

トニオは空中におり、その一撃を避ける事は不可能だった。しかし、斜め後方に付いていたリィナがトニオに真横から飛び付き、炎の塊はトニオに当たる事無く通り過ぎて行った。

そしてその炎の塊はそのまま放射状に飛び、私の立っている場所に落ちてきた。それを寸前で察して、飛び込むような動きで避ける。

顔を上げて、トニオとリィナ、それと民族衣装の少年が居る方を向く。民族衣装の少年はそれまで持っていた弓を槍に持ち替え、高台から飛び降りてトニオとリィナの目の前に降り立った、丁度そのぐらいタイミングだった。民族衣装の少年が言う。

「おまえ達、絶対にここは通さないぞ！　村はぼくが守るんだ！」

それから少しだけ驚いた表情をしてから、それまで以上の憎しみや恨みを込めた眼差しと共に槍の穂先を私に向ける。

「とくにおまえ！　おまえは絶対に通さないぞ！　空からきた悪意！！」

「あら～？　初対面で随分と嫌われちゃったわね～？」

少々気になる事を言っていた気もするが、それを無視して少しおどけてみせる。トニオとリィナは民族衣装の少年が高台から飛び降りてくるまでの間に、距離を取っていた。

私は右手のナイフの出力をスタンモードに変更すると、全速力で民族衣装の少年との間合いを詰める。相手の少年も、槍の届く間合いまで近付くべくこちらに突進してくる所だった。
相手の得物は槍。確かにリーチの長い得物だが、逆に近い相手に対しては少々取り回しが悪く、間合いに入ってしまえばナイフでも十二分に勝機があった。
私が間合いに入ろうとすると、それを阻止すべく、そして致命の一撃を入れるべくして槍による突きが繰り出される。それを右手のナイフでいなして槍の手元の更にその奥まで間合いを詰める。
そして少年の左肩に私の右肩を押し当てる程に密着すると、左手に握っていたハンドガンを少年のコメカミに押し当て、躊躇無く引き金を引く。

出力は勿論、スタンモードに切り替えてあった。

しかし、頑丈さが売りで、作りが大雑把で、しかも大出力なテノラの製品だ。

しかも完全なゼロ距離。

安物と言えども、コメカミに密着させた銃口から放たれたフォトンの銃弾は、少年の脳を大きく揺らしてお釣りが来る威力を容易く叩き出した。

「うわ・・・」
「あちゃ～・・・」
「おいおい・・・」
「あらあら～・・・」

少年のコメカミから血が流れる。その量は中々の物で、これはひ

ょっとするとひょっとするかも知れないと思わせるには十分な量だった。

リィナから、少年の止血がてらに説明を受けて、少々の衝撃と共に、強い後悔の念を抱いた。

この、うっかり手荒くのめしてしまった少年は、カーシュ族である可能性が高い事。カーシュ族は種族ではなく部族であると言う事。カーシュ族の戦士は確かに好戦的だが、本来は心優しく、警告や交渉も無しに戦闘を仕掛けてくる事は、通常では有り得ないと言う事。私が与えた外傷が一番大きい物の、それ以外でも既に戦闘を行った直後のような傷跡が体中に見受けられたこと。

「え、と言う事は～・・・」
「うん。カーシュ族の村で何か起こってるのは、ほぼ確実だと思う。」
つまり、気を失わせずに動きだけを止めて話を聞ければ、色々と分かったかも知れないと言うのだ。この大雑把な作りのハンドガンが非常に恨めしかった。
トニオが頭の後ろを掻きながら、少し面倒くさそうに言う。
「あ～・・・仕方ねぇ、二手に分かれるか。俺らは船までコイツを治療しに戻る。お前とエミリアで先に行って、村の様子を見て来い。」
「えぇ！？　いや、それだったらあたしらが戻った方が良いんじゃ・・・？」
「別にそれでも構わないけど、あんた達の船に医療ポッドってあるかい？」
「う・・・無い、と思う・・・う～、どうしてこんな危なそうな事を・・・そりゃあ、カーシュ族の村の事は気になるけど・・・。」
「なら、私だけで行きましょうか～？」
「道は、分かるのかい？」
「あら～・・・。」
エミリアの方を見る。明らかに嫌そうな顔をしているが、それでも道案内が出来る人が絶対に必要だった。
「お願い、出来るかしら～？」
「う～・・・分かったわよぅ・・・。その代わり、ちゃんと守ってよね！」
「ええ～、任せて～♪」

トニオとリィナが少しホッとしたような顔をしてから、止血を終えた少年を担ぎ上げる。

「それじゃ、俺達もなるべく早く後を追い掛けるからよ！」
「あんまり、無理しないようにね？」
「ええ～、よろしくお願いしますね～？」
「おう、じゃ、後でな！」

そう言ってトニオとリィナが来た道を戻り始める。それを少しの間眺めていたエミリアが、こちらに向き直ると、少しだけ早い歩調で歩き始める。

「じゃ、あたし達もいこっか？　なんだかんだ言っても、やっぱりカーシュ族の村の事が気になるし！」
「ええ～、行きましょうか～。」

途中、バグデッカと言う顔面が分厚い装甲で覆われた大型の原生生物との戦闘があったが、どうにか切り抜ける事が出来た。
武器の威力が足りない為に、装甲の届かない脇腹の辺りに、こちらに向って飛んで来たサンド・ラッピーを掴んで突き刺して致命的なダメージを与えると言う、何とも間抜けな倒し方をしたのも、終わってしまえば良い思い出だ。

エミリアが言うにはもう直ぐそこらしい。なるほど、確かに火の匂いがして来た。火は言い換えればそこに人が住んでいる象徴とも言える。
しかし、その匂いにもっと別の匂いが混じってくる。植物が焼ける匂いと、動物が焼ける、微妙な匂い。木材が焼け、鉄やガラスが溶け出す少し不快な匂い。それらと合わさって、憎しみや復讐心と言った悪意的感情の匂いが鼻腔をくすぐる。久しく嗅がなかった匂いだが、何と香しい事か。しかしその他の匂いが余りにも不快過ぎる為にそれらの僅かな芳香も台無しとなってしまっている。もっとも、これらの匂い全てひっくるめて、エミリアから言わせれば、

「何これ・・・何か焦げ臭い・・・。」

らしいのだが。しかし、確かに普通に考えればひたすらに焦げ臭く感じるだろう。小走りで密林を抜けると、そこは異様に強い熱気とオレンジ色の光に包まれていた。

「まぁ・・・」

「何よこれ・・・」

エミリアと共に言葉を失う。

村が、燃えている。

その燃え方からして、恐らく火が放たれたのはつい先ほどの事なのだろうというのは容易に想像が付いた。何より私が驚いたのは、その火では無く、その火の中から人の匂いを幾つも感じた事だった。

その内の大半は倒れていると思われる低い位置から感じ取れ、その他の立っていそうな人数は、大雑把に数えた感じだと十人前後と言った感じだった。

「一体誰がこんな・・・」

「待って、エミリア。誰か出てくるわ。」

そう言ってエミリアを手で制す。

すると建物の間から、その原始的な建築物に対してとても不釣合いな格好の集団が現れた。その集団は皆バラバラの格好をしており、何よりもシティで見る類いのファッションが多く、原始的な建築物とはある意味で対極的な印象を与えた。そしてその一番前を歩く、赤いノートのような物を持ったリーダーらしき人物が更に異彩を放って見えた。

耳の形などからヒューマンらしい事は分かるのだが、異常に肌が白く、髪も完全に真っ白、眼も赤いので恐らくはアルビノなのだろう。しかし何より問題なのは、その服のセンスだった。

真っ黒のロングコートを着ている、のは構わない。だがその胸を肌蹴させるスタイルは如何な物か。確かに私もヘソ出しなので人の事は言えない気もするが、あんな貧相な胸板を露出させた所で一体誰が得をすると言うのだろうか。もっと分厚い胸板を手に入れるか、

しっかりとした胸毛を生え揃わせてから出直して貰いたい。もっとも、あの真っ白い肌にたくましい胸毛が生えていたら、いっそ色々と通り越して吐き気を催しそうな物だが。

と、そこまで感想を抱いてから、エミリアが声を上げる。

「まさか、この火事ってあいつらが・・・？」

「ええ、恐らくその可能性が高いでしょうね。見た感じだと、あの黒服の男がリーダーのようだけど・・・？」

そこまで言って、もう一つ違和感に気付く。リーダーらしい男は悪い笑みを浮かべているが、その後ろの人達は皆揃って上の空で、焦点の合わない目をしている。

「ん～・・・？・・・洗脳、かしら・・・？」

洗脳に関しては色々な物を見て来たので、それなりには詳しいつもりだ。例えば、ビーストだと、洗脳する時にはそのビーストが保護意識を持つ対象を任意で再設定してしまえば良いだとか、ニューマンは自意識が強いせいで意識を保った状態での洗脳が難しく、意識を殺さなければならないから面倒だとか、ヒューマンは記憶を少し弄るだけで意外と思いのままに動かせるようになるだとか、キャストは論外だとか、そう言った話だ。あの様子だと、意識を殺して身体だけにした上で、その身体を任意で動かしているように見える。

実はこの意識を殺すと言うのが意外と厄介で、そこそこの設備が必要なハズなのだが・・・。

「洗脳？　・・・ってかそれよりあの黒服の斜め後ろ！　あれってワレリー・ココフじゃん！」

そう言われて黒服の斜め後ろ辺りの人物を見る。そこには確かに、

先ほど見た中年を過ぎたぐらいのビーストの男性の写真と、ほぼ同じ顔の男性が立っていた。
ほぼ、と言うのは、今の表情が余りにもマヌケ過ぎて、同一人物かどうかの判断に少し迷ってしまったからだ。それほどまでに、酷い顔をしている。

「確かに・・・かなり間抜けな顔をしているけど、ワレリーで間違いは無さそうね。」
「間抜けって・・・」
「ん？　貴様達、ここで何をしている？」

と、ここで先ほどまで赤いノートのような物を手に持ってニヤ付いていた黒服の男がこちらに気付いた。隠れるつもり半分に、木の陰から見ていたのだが、バレてしまったのでは仕方が無いと、木の陰から出て男と対峙する。

「そちらこそ、ここで何をしていらしたんですか～？　見た感じですと、放火を行ったように見えますけど～？」
「それならば、どうだと言うのだ？　消え行く存ざ・・・キ、キサマは・・・ッ！？」

途中まで言って、発言を止める。そして、忌々しい事この上ない事を示す程に酷く顔を歪ませる。中々に整った顔立ちをしていると言うのに、まったく台無しだ。

「キサマ・・・悪意か・・・！　まさか封印を逃れた悪意が居るとはな・・・まぁいい、余興には丁度良いだろう。」
「私は貴方の言っている言葉の意味が全く分からないのですが～？　あと、質問に答えてください～。」
「ふん、誰が悪意の質問などに答えようか・・・キサマのその化け

の皮、剥いでから消し去ってやる！」

そう言うと共に、黒服の男がエミリアの目の前まで、それこそ本当に、比喩表現抜きで『あっという間』に移動する。

私は咄嗟にエミリアを右肩で押して動かし、左手のハンドガンを目の前の黒服の男へと向け、躊躇無く発砲する。男はその弾丸を、発射を見てから避け、素手だった両手に刀のようなセイバー系統と思われる剣を二振りナノトランスさせて、切り付けて来る。

その攻撃を右手のナイフでいなし、受け、時に避けながら、左手のハンドガンを攻撃の僅かな間隙に撃ち込んで行く。しかし、それらの完璧な隙を突いて放たれたハズの弾丸のその尽くが避けられ、防がれる。

右腕一本で両手から繰り出される攻撃を受けて行く内に段々と押され始め、最終的に、相手の両手から繰り出される全力の一撃を、ナイフで真正面から受け止める、と言う失態を犯してしまう。

それは例えるならば、超大型のハリケーンに対する木造建築のような、大津波に対する小船のような、火砕流に対する自動車のような、そんな暴挙。

当然の如くにナイフは、刃の部分はおろか、フォトンリアクターに至るまでの全ての部品が粉々に砕け散ってしまう。そしてフォトンリアクターが破壊された事により小規模な爆発が起き、私に小さな隙が生まれてしまう。その隙を見逃すワケも無く、既に振り切ったが為に引き戻せない両腕に代わって、足を用いて私の身体を大きく薙ぐ。

腹部を狙った回し蹴り、と言った方が分かりやすいだろうか。

その蹴りにより跳ね飛ばされた私は、近くの巨木にノーバウンドで衝突する。そして黒服の男は背後に多数の武器を召喚すると、その内の刃物を片端から私に投げ付けてくる。

最初は両腕、次に両脚、腹部、胸も貫かれ、最後の一本は私の眉間を射抜いた。その数実に十八本。

更に男は手を休めること無く背後の武器の中から拳銃を二丁手に持つと、私目掛けて大量の弾丸をばら撒き始める。その連射速度は、正に暴風雨のようだった。
十、百、五百発近く撃ったかも知れない。その光景を見て、堪えかねたエミリアが黒服の男に飛びつき、腕を掴んで射撃を止めるが直ぐに跳ね飛ばされ、銃口を眉間に突き付けられる。

「まずはお前から消してやろうか？」
「い、いや・・・いやー！！！」

その声と共にエミリアから眩い光が溢れ出す。その光に気圧されたのか、男がエミリアから数歩下がる。

「この力・・・まさかあなたは・・・！？」
「何・・・！？」

と、同時に大木に縫い付けられて蜂の巣にされていた方にも、変化が起こる。

「ワたシの・・・エミリアに・・・・・・・・手ヲ・・・・出スなァ！！！」

そう叫ぶと共に、何時の間にやらＳＥＥＤフォームと化した大木から伸びる毒々しい模様の触手が、リアの身体を戒める全ての剣を一斉に引き抜くと、それらを一斉に黒服の男の方向へ、かなり適当に投擲する。さらにリアが、左腕を極太の触手のように変えて、その太い鞭のような触手を、真上から男に叩き付けるように振る。
男は飛んできた剣を無意味な程アクロバティックな避け方で避け切ると、真上からの極太の鞭をギリギリの所で後ろに飛んで避ける。そのまま忌々しい事を如実に表すような舌打ちを残して、通常では

有り得ない程大きく跳躍すると共に、その姿を晦ませる。
と、同時に姿を晦ました男の事など何処吹く風か、男が姿を晦ませると共にその場に倒れこんでしまったエミリアに、そのままの姿で駆け寄る。

「エミリア！！」

それと同時に、トニオとリィナが到着する。

「おい、これは一体・・・ってかお前何だその姿！？　それじゃお前、まるで・・・！」
「ア、えェと、コレは・・・あ、そンナ事ヨりエミリア！」

そう言っている間に、私が助け起こしたエミリアの容態を、リィナがチェックする。

「・・・うん、気を失っているけど、命に別状は無さそうだね。」
「あぁ、良かっタ・・・。」

心の底から安堵する。と、後方から、トニオの声が聞こえて来る。

「あ、おいコラ！待ちやがれ！」

その声に釣られるようにして後ろを振り返ると、真上を多数の船がリモートで飛来し、その場に居た間抜け面をしていた人達全員がそれらの船に乗り込んで逃げ出している所だった。

「何だってんだあいつら、突然ハッとしたかと思ったら一目散に逃げ出しやがった。こんなに文化保護地区を荒らしやがって・・・一人残らず捕まえてやる！」

「でも、今の人達、様子が変だったよ？　ハッとするまでは上の空みたいだったし・・・まるで、洗脳でもされてるみたいだった。」
「エぇ、そレに関してはワたしも・・・」

と、その時だった。エミリアの通信機が鳴り出すと共に、クラウチさんの声と映像が出てくる。

「おい！　ワレリーの船が動いたぞ！　おめぇらキッチリ追い立てろ！　どうなってんだ！オイ！エミリア！」

・・・これは映像も同時に届ける類いの通信機だったか。慌てて通信機に対して、自分の右半分だけが映るように身体の位置を調整する。こうしなければ、今の私をモロに見られる事になってしまいかねない。と、そんな小細工をしてる間に、リィナが通信機に顔を近づけて、大声を出して来たクラウチさんに対抗するような怒声を張り上げる。

「うるさいよ！通信回線なんだからわめかなくても聞こえてるって！！」
「あぁ？誰だおめぇ？」
「たまたま一緒に行動してたフリーの傭兵だよ。エミリアは今、怪我をして気を失ってるから、大きな声出さないで。」

そのリィナの言葉を聞いたクラウチさんの顔が、毛むくじゃらなせいで分かり辛いが確かに歪む。その顔は、悔しそうであり、心配そうでもあった。

「怪我しただと？　・・・あのバカ！　分かった、ワレリーはこっちで追うから、テメェらはとっとと戻って来い！」
「ア、はイ～。了解デす～。」

それを最後に、通信が切れる。私は依然として音を立てて燃え盛る村の方へと向き直る。その先からは、微かだが、生きた人間の匂いがした。

「・・・仕方無イ、でスよね。」

そう言うと共にリアは、自分の両手の指を噛み千切る。その噛み千切った指は、地面に落ちると共にムクムクと膨らみ、形を変え、パノンへと変化した。

更に指の傷口から湧き出る黒い液体を、手近の木に塗り付けていく。すると、黒い液体が付着した場所を中心に木々を変質させ、変化させて大型のＳＥＥＤフォームへと、その姿を変える。

「・・・サぁ、行クわヨ。」

そう言うと共に、ＳＥＥＤフォーム達が一斉に動き始める。パノンは燃え盛る建物の中へと戸惑う事無く飛び込んで行き、中から逃げ遅れた人々を引きずり出して行く。

木々が変化した大型ＳＥＥＤフォームは森に燃え広がらないように、パノンが中に誰も居ない事を確認した建物から順番に潰して行く。その統率の取れた動きはさながら一個の軍隊か、それとも巨大な一つの生物のようだった。

そのあまりの手際の良さに、それを傍で見ていたトニオは戦慄する。

もし、こんな風に完璧な統率の元、ＳＥＥＤフォームの軍勢が押し寄せて来たら？

確かにイルミナスは兵器のようにＳＥＥＤを使っていたが、ＳＥＥＤフォーム自体に統率された動きは特に無く、本能の赴くままに

動くＳＥＥＤフォームは各個撃破の的だった。
もしＳＥＥＤフォームに、統率された動きが出来るだけの理性があったなら、或いはグラールは本当に終わっていたかも知れない。
リアは今、建物の解体作業と救助作業の指揮に追われているらしく、こちらの動きには気付かない。今ならこのグラールの最後で最大の危機を葬り去る事が出来るかも知れない。
そう考えたが、身体が動かない。
さっきまで一緒に戦ってきた、一時的とは言え仲間を殺すような真似が、果たして義理に厚いビーストの、その中でも特に義理人情に厚いトニオに、そんな事が出来るのだろうか？
無論、答えはＮＯだ。
本当の事を言えば、リア・ゲート本人だって分かっている。このリア・ゲートと名乗る化物は、確実にその息の根を止めなければならない。このグラール太陽系の未来を考えるならば、絶対に『居てはならない存在』である事など、むしろ本人が一番良く理解している。しかし、死にたいとは何故だか思えない。
死ぬのであれば、人として死にたい。そう考えれば考える程に、自殺をしたいとは思えなかった。何故なら、自殺をするとは、それはつまり自分が人では無いと完全に認めてしまう事と同義だったからだ。
それだけは絶対に嫌だった。
私は人だ。
それは以前、一度放棄してしまった思いだった。
もう一度掴んだのだ。もう二度と手放したくは無い。
その思いとは裏腹に、身体を変化させ、十数ものＳＥＥＤフォームを自在に操るその時間に比例して、リア・ゲートの中の『人』は、急激に死んでいった。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」（後書き）

ども！コメントのお陰でハンドレッド執筆パワーが発動してまさかの十月中投下を可能にしてしまった金属製の箱、ジュラルミンダンボールです！　今回のサブタイトルも、『Ｗｉｔｈ　ｍｅ』を超訳した物になってます。ちなみに、次回のサブタイトルは既に決まっていたり？しかも実は本編に出てたりなんだり？分かった人はコッソリメッセージかコメントでわっちに答えを送り付けるか、又は一人コッソリほくそ笑むと良いかもデス！

さてさて、次回はついに致命的なお話になっちまいやがりますね！今からどう言う感じで書こうかって頭がビリビリ言っちまいやがってますですよ！

今度こそ本当に遅くなると思いますので、気長に待て次回！では

では！

第七話「あなたにだけは、知っていて欲しい。」

『『Ｎｏ．０８０』改め『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

Ｎｏ．０８０は、ＳＥＥＤウィルスを直接体内に投与されたヒューマンとしては初めて、『理性を保ったまま』でのＳＥＥＤフォーム化を為した、最初の例である。この個体の特異な変化に対して、以降ニューデイズの星産み神話に出る女神『イザナミ』の個体名を付ける事とする。

（中略）

今は当該個体の体質や体調などのデータを応用し、理性を保ったままＳＥＥＤフォームへと変える方法を研究しているが、それももう間もなく実践段階へと昇華する事だろう。

当該個体に関する研究資料足り得るデータは既に粗方採取済みであり、これ以上の巨大化や形態変化が進行する前に、早急に処分する事を進言する。

『『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

イザナミの新たな可能性が発見された事に関して、ここに報告する。
当該個体は理性を保ったままＳＥＥＤフォーム化を為した最初の例であり、
既にデータは取り終えている物と見なしていた。しかし近日、当該個体はＳＥＥＤフォームをその身から生成する能力がある事が判明した。
（中略）
これは画期的な発見であり、当該個体の処分は先延ばしにする事をここに進言する。

『『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』
イザナミはどうやら自身の感情からＳＥＥＤフォームを生成している事が判明した。これにより理性を保ったままでのＳＥＥＤフォーム化の研究も、次の段階へと進む事が出来るやも知れない。
ＳＥＥＤが生物の持つ感情に関係している事は近年の研究から分かっていた事だが、それこそがＳＥＥＤの中核である事が、これによって判明したのである。
（中略）
しかしこのイザナミの何と妖艶である事か。ここまで魅せられる研

究対象はそうそう出会える物では無い。当該個体の処分の先延ばしを進言する。

『『イザナミ』に関する研究経過報告書（？）』

恐らくこれが最後の報告になるだろう。イザナミは隔壁を強力なＳＥＥＤフォームを使い突破し、研究所全体が今やイザナミの領域、星産み神話に出るあの世、ヨモツヒラサカと化している。

この部屋ももうそろそろ駄目かも知れない。

私は最後に言いたい。イザナミは神だった。イブヤザカを上り切り、誰も触れてはならない、開けてはならないヨモツヒラサカとの間を塞ぐチガエシを開いてしまった我々を、罰するべくして現れた、荒ぶる神だった。我々は、チガエシを開ける事の無いよう、もっと早くに彼女を処分すべきだった。だが、我々は好奇心に負けてチガエシを開いてしまった。

私は内部から全ての隔壁を閉じ、電子ロックの機構全てを物理的に破壊する事で完全に封鎖する事に成功した。この部屋の隣の部屋は全てのネットワークから遮断されている。その部屋で、今、全自動で希望を作っている。これを彼女の本体に挿入する事が出来れｂ

「・・・ん・・・ん～・・・。」

目を覚ます。そこは酷く閉ざされた空間だった。あえて例えるなら、棺桶や試験管等が近いかも知れない。
一番新しい記憶を探る。
確か私は、燃え盛るカーシュ族の村から逃げ遅れた人を助け出して、森に燃え広がらないように建物を壊して、それで自分を強制的に停止させる為にハンドガンで頭を撃って・・・
そこで一つの重大な事を思い出す。と、同時に上半身を思い切り上げたせいで低い天井に頭を強くぶつける。
痛みで更に頭がハッキリして来た。と、同時に左目からパノンや木のＳＥＥＤフォームから受信する映像が見えて来る。パノンはどうやら見慣れない船の中に居るらしかった。窓から見える景色から察するに、恐らくまだクロウドック地方なのだろう。木も同じような場所に居るらしかった。その様子から察するに、パノンも木も悪さをしていないようだった。
悪さをしていない事に大きな安堵感を感じると共に、パノンの内の一つの視界にトニオが入る。トニオはパノンを見て訝しげに溜め息を吐くと、
目の前に設置されたカプセルのような何かを開けた。と、共に目の前の視界が開け、トニオの顔が直接見えた。

「よう、お目覚めか？」
「えエ～。中々ノ快眠でシた～。」
「そうか。にしても、いきなり自分の頭ブチ抜くからビックリしたぜ・・・ま、大丈夫なようで何よりだけどな。じゃ、取り合えずコイツらどうにかしてくれねぇか？　襲ってきたりはしねぇんだが、こう、気味が悪くてよ・・・。」
「ア、はイ～。ちょっト待ってテくダさいね～。」
そう返事をすると共に、子供達を一箇所に集める。集まった所で

頭の左側を大きく開き、開いた口で子供達を纏めて飲み込む。木も、パノンも、全て。
飲み込み終わった所で、適当なタオルをナノトランスさせて取り出し、そのタオルで左目を眼帯のように覆う。
そして、大きく何度か深呼吸をして、手近な場所に腰を降ろす。

「終わったか？」
「ええ～、ご迷惑をお掛けしました～。」
「ああ、まぁ気にすんな。所で、お前・・・」
「はい。・・・私は人型のＳＥＥＤフォーム、です。・・・すいません、黙ってて。」
「そう、か。・・・なんつーか、なんだかなあ・・・何でお前は封印されなかったんだ？」
「・・・私にも、よく分からないんです。」

その答えに、間違いは無かった。このグラール全体に存在するＳＥＥＤは全て葬られ、封印されたハズなのだ。どのようにして、どのような道具や兵器、施設を使ってそのような大規模な事を行ったのかは私にはよく分からないが、ともかく全てのＳＥＥＤは根絶されたハズだった。なのに私だけは残っている。それがどうにも分からなかった。
理由を幾つか考えてみるが、どれもこれも推測の域は決して出ない。図書館等で調べれば早いのだろうが、市民権はおろか戸籍や出生届に至るまで全てがまるで残っていない私に、図書館に出入りする権限は無かった。

「そうか・・・ＳＥＥＤは見敵必殺、見付け次第ぶち殺しが基本だ。が、お前のお陰でかなりの数の人が助かったし、火が燃え広がるのも防げた。その点に関しては礼を言わざるをえねぇ。」
「ええ。どういたしまして。」

「っつーワケで、お前が今度何かしでかしたら、俺がお前をぶっ殺しに行くって事で、良いか？」

つまり要約すると、『俺は気にしないぜ』的な事なのだろうと、何となく伝わって来た。だが、

「・・・すいません、私の命には、その・・・先約があるので。」
「先約？」
「ライアと言う方でして。その人が、既に予約済みですので。」
「ライア・・・？　まぁいい、そうか。じゃ、ダブルブッキングって事で良いんじゃねぇか？　どうせ、一人だと手に余りそうだしな！」

そう言ってトニオさんがケラケラと笑い始める。その笑顔を見て、何だか貰い笑いをしてしまいそうになる。と、その時、一つの大きな事を思い出す。医療ポッドの天井に頭をぶつけたのも、そもそもそれが原因だった。

それはとても大切な事で、それこそ『人で無くなってでも』守りたいと、何故かそう思えた物の事だった。

「あ！そう言えばトニオさん、エミリアは大丈夫なんですか？！」
「おう、大丈夫だ。お前らの船に運び込んで寝かせといた。今はリィナが付いてるからな、心配は要らねぇよ。」
「そうですか・・・良かった～・・・。」

胸を撫で下ろす。と、トニオが私の横に腰を下ろすと、一拍置いて話し始める。

「俺達はこれから、逃げた連中をとっ捕まえて色々と聞かなきゃならねぇ。ってなワケで、カーシュ族のボウズはそっちで預かっとい

てくれねぇか？」
「私は構いませんけど～、会社の方がどうかは、少し～・・・。」
「ま、お前が個人的に預かるって事にしときゃ幾らでも融通が利くんじゃねぇか？　手当ては一通りしておいたからな、後は寝かせとけば勝手に起きるハズだ。」
「ん～・・・分かりました、それではお預かりします～。」
「おし！　カーシュ族のボウズもエミリアも、もうお前らの船に乗せてあるからよ。じゃ、後は頼んだぜ！」

そう言うと共に、トニオが腰を上げると、私達の船にリィナを呼びに行く。それを追うようにして腰を上げると、水溜りのような物が視界に入った。それを覗き込みながら、タオルを少しずらす。
そこには、『お前は人じゃ無い』とでも言いたげな、黄色く光る複眼が、顔のほぼ四分の一の面積を占めていた。

広い宇宙を、クラッド6に向って、ゆっくりと、少し回り道をしながら飛んでいく。客室にはエミリアと、カーシュ族の少年。どちらも理由は違えど眠っているような状態である事に変わりは無かった。

クラッド6に至るまでの道のりを、少し考え事をしながらゆっくりと飛ぶ。

私は、エミリアを守りたかった。それこそ、自分自身を捨てててでも。カーシュ族の村人達を生死に関係無く炎の中から運び出したのだって、きっとエミリアが気に掛けるだろうからだった。

いつから自分はこんなにもエミリアに依存してしまっていたのだろうかと考える。最初は、ただのヒューマンの可愛らしい少女としか見ていなかった。パートナーになってから、なのだろうか？

そんな事をぼんやりと考えていると、通信が入った。掛けて来たのはクラウチさんだった。

「よぉ、今どの辺りだ？」

「ん～と～、今はクラマ宙域のあたりですね～。」

「あぁ？　そこはクラッド6との直線航路じゃねぇだろ？　あーまぁいい。とりあえず、お前の話を聞かせろ・・・と、言いてぇ所だが、通信機越しってのもなんだしな、三十分後にカフェに来い。」

「いや、三十分は、ちょっと～・・・。」

「どうしてだよ？　エミリアの容態は大丈夫らしいし、クラマ宙域の辺りならターボ噴かしてぶっ飛ばせば三十分ぐらい余裕だろ？十五分でお釣りが来るぜ。」

「いえ、エミリアともう一人引き取ってまして～。その子がそこそこ重傷なので、あまり飛ばすと身体に悪いかな～、と思いまして～。」

「あぁ？　もう一人居るだぁ？　ったく、メンドクセーもん増やしやがって・・・分かった！　んじゃあ妥協して五十分後にカフェだ。これ以上はまけねぇぞ？」
「はい～、了解です～。」

そう答えると共に通信を終わらせる。先ほどまでよりも少しだけ速度を上げて、クラッド６へと向う。

「おう、遅かったじゃねぇか。先に一杯始めさせて貰ってるぜ？」
「すいません～、途中でローグスの船団とルートが交差してしまって～。」
「あ～、そうか。すると、なんでこんなに早く着けたのかが逆に気になるな。」
「冗談ですよ～。本当は、少しゆっくりと飛んでいただけです～。」
「そうか。んじゃま、取り合えず俺の話に入らせて貰うぜ。」

そう言うと共に、僅かに真剣な面持ちに変わる。しかしそれも、顔の面積の半分以上を占める毛によって、イマイチ読み取りづらい物だったのだが。

「メンドクセーから結論だけ話すぜ。」
「ええ～。」
「ワレリーは、クロウドッグ地方に行った記憶が無いんだと。」
「・・・」
「だが、気が付いた時にはカーシュ族の村に居て、周りがボンボン燃え盛っていた、だとよ。」
「・・・」
「ヤツとは長い付き合いだ。・・・・・・嘘はついてねぇ。」
「・・・そう、ですか。」

やはり、洗脳なのだろうか？　しかしそれには不自然な点が多い。そもそも自我や記憶が曖昧になるような強力に意識を殺す洗脳は『突然切れる』と言う事はほぼ有り得ない。意識を殺すのにはかなり大規模な設備が必要だが、その意識をまた復活させるには、それと同等か、それ以上の規模の設備、いや、いっそ施設が必要となってくる。

それこそ、ヘルメットやゴーグルなどの形状をした装置を使用した洗脳であれば、それが取れると共に洗脳が切れると言うのも頷けるのだが、そういった装置が外れたようにはとても見えなかった。

その他の洗脳方法では、確かに切っ掛けがあれば突然洗脳が切れると言うのも頷けるのだが、こちらは洗脳された人に、洗脳されている間の記憶がしっかりと残ってしまう。

まったく新しい、イレギュラーな洗脳法があるのか？　だとするとあの黒服の男の危険度は、強さの数十倍以上の物となる。何故なら、その新しい洗脳法に対抗する手段が手元に無い上に、同

時に十人ほどの人数を動かしていた事から、かなり大規模な犯罪を行う事も可能であるからだ。更に言うと、もしもその洗脳法で同盟軍やグラール教団のような、大きな組織が乗っ取れるとしたらどうなるか？

ＳＥＥＤ事変と同等か、心的被害ではそれ以上の大惨事が起こりかねない。

と、そんな事を真剣に考察していると、クラウチさんが、沈んだ空気を少しでも戻す為か、明るめの口調で、話題を変える。

「まぁ、俺としては貸してたモンも回収できたし、それ以上、特に言う事はねぇよ。エミリアみてぇな生きる足手纏いを抱えてた割りには、中々の仕事っぷりだと思うぜ？」

「あ、いえ～。エミリアもちゃ～んと役に立ってくれましたよ～？」

「エミリアがか？　ッハ！　軽い怪我で気絶する足手纏いを擁護するたぁな！　ま、これからも頑張ってくれよ？　お、そうだ。ここは俺の奢りって事にしといてやるからよ。好きなだけ飲め！」

「はい～。ありがとうございます～。」

その二十分後ぐらいにチェルシーから「エミリアがおっきしたヨー。」と言う連絡を受けるまで、クラウチさんが後悔するほど飲んで食べた。特に甘さ５メガ倍プリンは四個ほど頂いた。

罰ゲーム用との事だったが、非常に美味しく頂いた。クラウチさんは会計の時に「二度と奢らねぇ」と呟いていた。少し、悪いことをした気もしたが、気にしない事にした。

「あ、いたいた！」

その声に、素早く振り向く。そこにはエミリアの姿があった。少し心配そうで不安げな顔をしていたが、顔色自体は非常に健康的で安心した。

「あら～エミリア～！　もう動いて大丈夫なの～？」
「あ、うん。全然平気。ってかそれよりさ、おっさんに呼ばれたって聞いたけど・・・もしかして、怒られた？」
「いえ～？　むしろご馳走してもらったぐらいよ～♪」
「あ、そうなんだ！　良かった～・・・って言うか逆に奢ってもらったの？」
「ええ～。ちょっと顔色が悪くなる程度には食べさせて貰って～。もう満足満足って感じかしら～。」

そう言いながら、お腹を軽くさする。それを見てエミリアがその顔を少し綻ばせる。それがちょっと嬉しいと感じた時、本当に自分は、いつからこの子にこんなに依存してしまったのだろうかと、少しだけ真剣に考えてしまう。
と、エミリアが思い出したように、少しだけ真剣な顔になる。

「あ、それとは別の話になるんだけど・・・二人だけで話したいから、マイシップまで来てくれないかな？」

「あら～、私の部屋じゃ駄目～？」
「あそこメリー居るじゃん。」
「あらあら～。」
取り合えず、マイシップまで移動する事にした。

「話したい事って言うのは、さ。あの、カーシュ族の村での事、なんだけど。」
エミリアが椅子に腰を掛けると共に、神妙な顔で話し始める。
「あたし、あの時、黒服のヤツに飛び掛って、跳ね除けられてさ。で、その後、なんだけど・・・。」
「・・・」
「あたし・・・銃を突き付けられて、さ。それで、あの・・・戦った、て言うのかな？　そんな感じの事を、こう・・・」
「ええ、そうね。」
「だよ、ねぇ・・・あの体が勝手に動く感じ・・・夢、じゃ、無い、んだよね？」
「ええ、そうです。夢ではありません。」
「へ？　だ、誰？！」

そうエミリアが言うと共に、エミリアの体から、まるで幽体離脱するようにして、異常に輝かしい女性が姿を現す。私は以前、一度会っている女性だった。

「ようやく、私の存在に気付いてくれたのですね、エミリア。」
「ちょ・・・何!? え、誰あんた!? い、今、あたしの中から出てきた・・・!?」
「私はミカ。あなたの中に存在する、旧文明の民・・・。」

その言葉と共に、エミリアが頭を抱えて椅子の中で丸くなる。

「な、何っ? 頭の中に何か、流れ込んでくる! これは・・・!」
「エミリア! ミカ、貴様エミリアに何ヲ・・・!」
「お、落ち着いてください! 記憶の共有をしただけです! 私の事は、改めて説明するよりも、こうして説明した方が早いと思ったので・・・」

そう言ってミカが私の方へ手を向けて説得をする間に、エミリアが、頭の中の事を順に理解し始める。

「え・・・嘘・・・なにこれ・・・こんな、ことが・・・?」

その言葉に、かなり険悪な空気を纏っていた私と、ミカが反応する。

「エミリア?! 大丈夫?」
「あ、うん、多分。でも、これって・・・」
「・・・貴女の気持ちは分かります。ですが、これは紛れも無い事実なのです。」
「これ・・・つまりはあたし達の抹殺計画って事でしょ・・・?」

「肉体を器と、精神を命と考えるのであれば、その通りになりますね。」

あの乗っ取り計画の記憶を、エミリアに入れたのだろうか。と、エミリアがこちらを向いて、話し始める。

「えっとね、聞いて欲しいんだ。あのさ、旧文明人が・・・」
「ええ、大丈夫よ。この前、エミリアが寝てる間に、ミカに聞いたわ。」
「え、あ、そうなんだ・・・ね、ねぇリア。ちょっと、あの、改めて聞きたいんだけど・・・良い？」
「ええ、どうぞ。」

「あんたって・・・ＳＥＥＤ、なの？　あのレリクスでの事って、夢じゃ無かったの・・・？」

来てしまった。
意外な程早かった。が、それでもこの数日間は、本当に幸せな時間だった。本当に、良い夢だった。
でも、夢は所詮、すぐに覚めてしまうものだった。私は名残惜しさを感じながらも、吐き出すように言う。

「・・・ええ。私は人型のＳＥＥＤフォームよ。あのレリクスでの一件は全て夢なんかじゃ無かったの。・・・ごめんなさい、エミリア。ずっと、黙ってて・・・。」
「じゃあ、あんたは、あたしのせいで・・・」
「・・・？」
「あたしのせいで、一度、死んじゃったの・・・？」

「・・・・・・・・え・・・・？」

重い沈黙が流れる。と、その現状を見たミカが、これ以上は話せないと判断したのか、「落ち着いたら、また呼んでください。」とだけ言ってフッと消える。

エミリアが心の中で何を思っているのかは、よく分からない。でも、私としては、予想だにしない発言に、頭の中がまるでフリーズ症候群のキャストのように止まってしまっていた。

それまで私は、自分は死んで当然だと思っていた。むしろ、最も理想的な死に方が、あのレリクスでの死だと、そう思っていた。

だと言うのに、目の前の少女は、「死んでしまった」と、「自分のせいで死んでしまった」と、そう言う。まるで、私が死んではいけないかのように、そう言う。

私の左目から粘性の無い液体が、頬を伝う。

それを指で擦り、右目で見る。

それは真っ黒い液体だった。

何故、今、それが流れ落ちたのか。それは何となく分かった。

これはきっと、人ではない身体の、出来る限りの、涙だ。

その黒い涙が、私に更に自覚させる。

「お前は人じゃない」と。

私は、それをエミリアに伝えなければならないと、そう思った。

私は俯きながら、エミリアに話しかける。

「・・・エミリア・・・あのね、エミリア。」

「うん・・・。」

「私は、ＳＥＥＤなのよ？」

「・・・うん。」
「人じゃ・・・無いのよ・・・？」
「・・・うん。」
「だから・・・その・・・気にしないで？」
「そんな・・・そんなのムリよ！」
突然、エミリアが声を荒げる。それに驚いて、俯きながら話していた顔を、思わずエミリアへと向ける。エミリアの目には、涙が浮かんでいた。
「だって・・・あたしのせいで、目の前から居なくなるのなんて・・・もうヤだよ、そう言うのは・・・。」
「でも・・・私は、人ですら無いのよ？　だから・・・」
「だからって！　だからって・・・・・。」
エミリアが声を押し殺しながら泣き始める。それに釣られるようにして、私の左目の黒い液体の量も増える。その液体の量は、白かった眼帯代わりのタオルを真っ黒く染め上げてお釣りが来るほどの量だった。
何よりも、自分が情けなかった。
何故、目の前の少女の涙を止めてやる事が出来ないのか。
何故、目の前の少女は泣かなければならないのか。
彼女の涙の、全ての原因は私にあるし、その涙を止める術が分からないのは、私が人では無いからなのかも知れない。
目の前で流れる涙を止められない自分が、どうしようも無く情け

なかった。

暫くして落ち着いたのか、エミリアが話し始める。その内容は、自分が本当に惨めに思えるほど、前向きだった。

「あのさ・・・あたし、この仕事向いてないと思うし、戦うのも、好きじゃない・・・けど、向いてなくても、耐えるから。戦い方とか、私に教えてよ。」

「え・・・」

「だって、あたしがもっとちゃんとしてれば、あんたが死ぬような事も無かった訳だし・・・。だからさ、その・・・」

「・・・」

「たぶん、まだ色々と、迷惑掛けちゃうかもだけど・・・でも、あたしのせいで誰かが居なくなっちゃわ無いように、ちゃんと、戦えるようになりたいんだ。だから・・・」

「・・・」

「その・・・人とかＳＥＥＤとか関係無しに、あんたは私の命の恩人だからさ。だから・・・居なくなって欲しくく、無いんだ。」

「・・・エミリア・・・。」

一つ、大きく深呼吸をする。呼吸すら必要無い身体に、空気を一杯に吸い込み、そして吐き出す。

「ええ～、勿論よ～。これまで以上に、バシバシしごいて上げるからね～？」

「！・・・うん！　あ、でもあんまりキツイのは、ちょっと・・・」

「問答無用よ～♪　とは言え、今日はもう疲れちゃったし、明日からでも良いかしら～？」
「あ、言われてみればそっか、朝からずっと働きっぱなしだったっけ。んじゃ、また明日！」
「ええ～、また明日～。」

エミリアが、船から出て行くのを見送ってから、一人で、少しだけ物思いにふける。

「人とかＳＥＥＤとか関係無しに、か・・・。」

「あ、ご主人！　ボクを置いて出かけるなんて酷いじゃないか！」
「ん～、ただのお仕事だったのだけれど～？」
「なんだ。なら良いや。あぁそうそう、ご飯の仕度はまだだから、先にシャワーでも浴びて来てよ。」
「そうさせて貰うわね～。あ、いつも通りに少なめで良いからね～

？」

「毎回言われなくても分かるよ。ボクはポンコツじゃ無いからね。」

そう言ってキッチンへとパタパタと駆けて行くメリーを見送って、シャワーを浴びに行った。その時だった。今まで身体を細かく変異させて誤魔化していた、重大な事を思い出したのは。

「あ、穴が・・・。」

本当に、上から下まで。胸の谷間部分にも穴が。この服はそこそこ良いお値段がする代物なのだが、もうほとんどボロ布も同然の有様だった。

「・・・あノヤろウ・・・・・・次はコろス、必ズこロス・・・。」

ぶつぶつと呪詛の言葉を並べながら、シャワーを浴びた。

シャワー室の前でメリーが呪詛の言葉の数々に怯えて縮こまって膝を抱えて耳を塞いで震えていたのは、メリーと私だけの秘密だ。

第七話「あなたにだけは、知っていて欲しい。」（後書き）

ヒャッハー！　これにて第二章完ダァ！！
そしてサブタイは毎度お馴染みＳＵＭ４１のＷｉｔｈ　ｍｅ超訳ダァ！！
これからは洋楽の歌詞の超訳からサブタイ持って来ようかなぁ。
あ～、だったら最初の三話のサブタイ考え直さなきゃな～。

ってな訳で、次はマクマホンミキサーという名の幕間を挟みたいと思うちょるのですが、皆さんにアンケを取りたいと存じましてございますですだよ。

Ａ
Ｂ
Ｃ

以上三つの内、どれにティンと来ましたか？　コメントのラストにこっそり何れか一つを入れてくださいな。それによってちょこっと変わったり変わったりするかも知れませんぜ。

あ、あとオリジナルな武器を使いたいと思うちょるんですが、どうでしょう？　だいじょぶですかね？　その辺りの意見も含めて、コメントをたっぷり頂けると嬉しいです！　もしかしたらまたハンドレッド執筆パワーが掛かるかも知れませんよ？
ではまた御機嫌よう、ハラショー！！（ド・ス風）

第八話（間）「リア・ゲートのやけに長い休日」（前書き）

ハラショーハラショーハラハラショー！！！！！！
こんばんわこんにちわおはようございますはじめましておひさしぶり！！！！！！　ほのぼのな日常回ですよ！正直、書いてて気持ち良かったです！ええ、非常に気持ちよかったですとも！！！！では、お楽しみください！！！テンションゴリ押し！！！？さぁ聞こえないなぁ！！！！！！

第八話（間）「リア・ゲートのやけに長い休日」

「ん～・・・イマイチ、ねぇ～・・・。」

エミリアが「えっ」と言ってこちらを振り向く。

「え、今の結構上手く捌けたと思ったんだけど・・・何処が悪かったかな？」

「あ、重心が高すぎてちゃんと刃が入ってなかったわよ～・・・っていうのじゃ無くて、この銃の調子が変なのよ～。やっぱりこの前の戦闘で数発貰ってたみたいでね～、撃つ度にフレームがガタガタ言うのよ～。困ったわ～、まだモトが取れて無いのに～・・・。」

「へ～・・・ちょっと見せて。」

そう言って私からハンドガンを奪い取るエミリア。それを嘗め回すようにじっくりと、隅々まで見て行く。途中途中で、「ふ～ん」だとか「あちゃ～」だとか呟きながら眺めてから、感想を付けて私に返す。

「もう駄目だね、それ。あと三発撃ったら機関部から弾けると思うよ。」

「あらそう～？」

そう言いながら、真後ろに振り向きながら立て続けに三発、ヴァーラの右目だけにピンポイントで撃ち込み、目の後ろの脳を破壊して殺す。

と、三発目の弾丸を吐き出すと共に、銃がグリップと銃身の先端部だけを残して弾け飛ぶ。

「あらほんとね～。」
「ん～、でもこれは困ったね。あ、アタシのハンドガン貸そっか？
一応、メンテしてあるから故障とかはしないだろうし。」
「あらあら～、ゴメンねエミリア～。それじゃ、借りるわね～？」
「うん。」

エミリアからハンドガンを借りると同時に、真後ろのヴァーラのアゴにソバットを入れる。アゴが破壊されて仰向けに地面に倒れたヴァーラの口の中に踵を刺し込みながら、後ろの数匹に立て続けにトリガーを引く。当然、全て急所は外してある。手の先などを撃たれて怯んだヴァーラ達に、エミリアが斬りかかる。その動きは、まだ素人の域は出ない物の、随分とサマになって見えた。やはり心構えと言うのは大事な物だと、強く感じた。
と、同時に足の下でもがいていたヴァーラの口の中に刺し込んでいた足を、更に奥へと沈めていく。そしてある程度行った所で硬い物にぶつかる。恐らくは背骨か何かだろう。
それを、ヴァーラの目を見てから、踏み砕く。それと同時に大きな血管も踏み貫いたらしく、ヴァーラの口から血の噴水が起こる。私はそれが収まるまで、足を抜く事はしなかった。

それから、大きく育ち過ぎて農家の手に負えなくなったゴルドルバを狩って依頼を終えると、船でクラッド６へと帰還する。
その日はゴルドルバの驚くべき逃げ足と、賞賛に値するほどのタフさのせいで、日がかなり傾いてしまっていた。エミリアにマックスプラス３トレーニングのやり方を教えて、明日は仕事を休んでトレーニングをするように言うと、その日はそのまま解散となった。

「と、言うワケで～、ついでに武器も送ってください～。」
『あたしゃお前さんの財布かい！　ま、別に構わないんだけどね。分かった、お前さんにとってはトビッッッきりに因縁深いヤツを、送ってやるよ。』
「あらあら～？　なんでしょう～？」
『ふっふ～ん、さぁね～？　・・・所で、カーシュ族の村の一件。現場付近でＳＥＥＤフォームを見掛けた消防隊員が居るそうなんだけど？』
「・・・言わなくちゃ駄目、ですか？」
『強制はしないよ。ただ・・・お前さん、一時的にでも『戻った』んだろう？　身体とかは大丈夫なのかい？』
「ええ、問題ありません。心身共に、今の所は安定してます。」
『そうか・・・ま、お前さんが完全に戻っちまったら、アタシが責

任持って真っ先にブチ殺しに行ってやるから、安心しなよ？』
「あ、それなんですけど～。トニオってビーストの人の予約も入ってしまって～。」
『トニオ？　トニオって、まさかトニオ・リマってヤツかい？』
「あらあら～、お知り合いだったんですか～？」
『ああ、ちょっと前まで同僚でね。・・・ん？　まさかアンタ、トニオのヤツに正体・・・』
「ええ～、少し事故ってしまって～・・・。」
『そうかい・・・で、殺されずに済んだのかい？　アイツも随分と丸くなったモンだねぇ。』
「あら～、そうなんですか～？」
『おう、昔のアイツときたらそりゃあ悪ガキでさ！』
「あらあら～。」

『っと悪い、もう時間だ。そんじゃ、明日の朝には届くようにするよ。じゃあな！』
「ええ～、それでは～。」

ビジフォンの電源を落とす。とりあえず今の所は武器が無いので強制的に休業の有様だ。エミリアにはマックスプラス3トレーニングを課しているので、完全にやる事が無かったりする。
　手持ちのお金は割りと貧相なのだが、折角のリゾート型コロニーだ、とりあえずショッピングフロアの辺りまで繰り出す事にした。

流石はリゾート。ナンパ率がハンパじゃ無い。女性を現地調達して楽しもうと言う青年がやたらと多い。先ほどショッピングフロアに入ってから、既に四回ほどナンパされている。
私はそんなに軽い女に見えるのだろうか？　それとも見境無しだろうか？
それにしても先ほどの男には驚いた。まさかナンパするキャストがこの世に存在するなんて、初めて知った。
ＧＲＭ社も一体何を考えてあんな思考ルーチンを組み込んだ電脳を作ったのだろうか。もしかしたら元ヒューマンだったりするのかも知れないが、身体を失うような大事故に見舞われた経験があるにしては色々と軽い印象を受ける男性だった。
そんな事を考えながらコーヒーを飲んでいると、「ちょっとそこのアナタ！」と言う男性の声が聞こえて来た。変わった喋り方の男性も居るものだと思いながら携帯端末で推理小説を読んでいると、後ろから肩を叩かれる。
「アナタよア・ナ・タ！」
「あ、あら～？　なんでしょう～？」
私の顔を見ると共に、驚愕したような、衝撃を受けたような、眉

間に銃弾を入れられて即死したような表情をする男性。しかしその目線はもの凄い速さで私の身体を上から下まで何度も往復する。そして、私の目を見てから、瞳をもの凄く輝かせて私の手を握ってくる。

「ティンと来たわ！！アナタ、ちょっとワタシに付いてきなさい！！」

「ん～、やっぱり最高だわ！　ワタシの目に狂いは無かった・・・！」

「それはどうも～・・・あ、次はこうですか～？」

「そうそう良いわ良いわ最高よぉ・・・！　アナタ、以前にもこう言う仕事した事があって？」

「いえ～、無いです～。」

「それにしては随分と心得てる感じじゃない？　あ、もう少しだけ肩を上げれるかしら？」

「あ、はい大丈夫ですよ～。そうですか～？」

「ええ、凄く良い感じよ。ちゃんと言わなくても目線くれるし、ホ

ント素人とは思えないわ。はい、これで終わりよ。・・・っふー、ここまで気持ち良く写真が撮れたのは久しぶりね。ごめんなさいねぇ、いきなりココまで拉致して来ちゃって。でもお陰でホント助かったわぁ、不健康な肌のモデルってクラッド６には居ないのよねぇ。」

「いえいえ～。それで～、あの～、約束通り～・・・」

「ええ、ワタシがアナタにピッタリの服をチョイスしてあげるわ！」

「ありがとうございます～！」

「選んでいただいて言うのも何ですけど～、あの、これは露出が～・・・」

「いいえ、これぐらいが丁度良いのよ。今までのアナタの服はちょっと大人し過ぎだったわ。これからはもっとその肢体をさらけ出してアピールするべきよッ！」

「いえ、でも、これは～・・・」

流石に、これはマズイ気がした。

極端に短い丈の、レザー素材で出来た豪快過ぎるスリット入りのタイトスカートに、ニーハイブーツと蜘蛛の巣のような網タイツ。そこにアクセントとして、厳ついトランプのような柄の白地ベルトが斜めに掛かっている。

肋骨の下ギリギリまで切り詰められたノンスリーブのブレザーに、ベルトと同様のトランプ柄のネクタイが緩めに締められ、二の腕まで到達するほど長いレザー素材の指だし手袋が両腕を覆っている。
前髪はエクステンションで追加されて、オシャレ値札付きのトランプの柄が沢山入った帽子を斜めに被っている。
もしも「悪役ですか？」と聞かれれば、「はい」としか答えられそうに無いほどに大胆な服装だ。何より問題なのは、いくら網タイツで覆われているとはいえ、動くと太股どころかお尻まで見えてしまいかねないこのスカートだ。これはどう考えても戦闘職には向いていない。

「ですが、これは動き難いと言いますか～・・・」
「あら、もしかしてアナタ動くお仕事だったの？　ならそう言ってくれれば良かったのにぃ。選びなおしてくるから、少し待っててね？」

そう言うと共に、また奥の超規模のクローゼットのような部屋へと消えていく。その背中に、聞こえるように言う。

「出来ればストーリアが良いんですけど～？」
「イメチェンの為にストーリアは禁止よ！　それと、おヘソと足はドンドン出して行くわよ！」

「これならどう？　動き易い上に、バッチリ足もおヘソも見えるわよ！」
「あら～・・・」

下着と見紛うほどに短くタイトな黒のショートパンツに、ギリギリ膝下ぐらいの踵低めの黒いロングブーツ。黒の無地のヘソが出る丈のTシャツに、胸を覆える程度の丈の黒いジャケット。手には甲が露出する黒い手袋をはめている。
露出した病的に白い肌と黒い服がコントラストを奏でており、非常に似合っている事は確かだ。しかしこれは・・・

「これ、悪役・・・っぽいですよね～・・・？」
「ええ、そうにしか見えないわね。だって仕方無いじゃない？　アナタほどナチュラルに黒が似会う人ってそうそう居ないんだから。そんな逸材見つけちゃったらワタシだって黒を選びたくなっちゃうわよ！　さ、どう？　これで良いかしら？」
「ん～・・・」

とりあえず、これは似合っている似合っていないで言えば圧倒的に似合っている。足がスースーするのも新鮮な感覚だし、何よりこれ以上この人を困らせるのも問題だと思ったので、コレで良いだろうと結論付けた。もっとも、お金を貯めてストーリアを買い直すつもりなのだが。

「・・・そうですね～、イメチェンって言うなら、これが良いですね～。はい、それではありがたく頂きます～。」
「気に入っていただけて幸いだわ。」

「はい～、それでは～。」
「あ！ちょっと連絡先だけ教えてくれないかしら？　またモデル頼むことがあるかも知れないから。」
「あ、はい～。どうぞ～。」

とりあえず、連絡先を交換する。その時になってようやくこの男性の名前が、『アルフレッド・リビングストン』と言う中々に威厳の有りそうな名前である事を知ったのは秘密だ。

「それじゃ、今日はどうもありがとね！　お陰でボスにも良い写真が渡せそうだわ！」
「あらあら～。それでは、これで～。」
「それじゃあね！」

そう言って別れを告げ、ウィンドウショッピングを楽しみにショッピングフロアへと戻っていく。

流石のチョイスでナンパ率が先ほどより五割り増しになったのは内緒だ。

「エミリア～、調子はどうかしら～？」
「あ、リア。今丁度終わったところ・・・って、あんた服着替えたの？　って言うか服買うほどお金あったの？」

そう言って汗を拭きながら、こちらを見て少しだけ驚いた表情をするエミリア。もうお昼時なので、そろそろ終わっている頃だろうと思ったが、ビンゴだったらしい。
そんなココは、クラッド6内部にあるスポーツフロア内の一区画である、スポーツジムエリア。古今東西南北のありとあらゆるトレーニングマシンが設置された、それなりの広さを誇るエリアだ。
身体を絞るご婦人方や人間凶器のような肉体を持つ傭兵、それにスカイクラッド社お抱えのスポーツマン達とそのファンの方々が一様に介するこのフロアは、ただトレーニングをするだけの場所にしては意外な程に人で賑わっている。

「んふふ～、良いでしょう～？　バイト代の代わりにタダで貰ったのよ～♪」
「へ～・・・何て言うか、凄く・・・悪役だね。」
「気にしてるんだから言わないでエミリア～・・・。所で、マックスプラス3トレーニングは終わったのよね？　それじゃ、ちょっと食べに行きましょうか？」
「え、でもお金無いんじゃ・・・」
「あらあら、大丈夫よ～？　一日ご飯抜いたからって死ぬ訳でも無いんだから～。」
「いや、それならやっぱり、自分のお金は自分で出すよ。」
「ステーキハウスなんだけれど～？」
「う・・・ま、まぁ多分大丈夫！　平気、きっと、多分、恐らくは・

・・・。」
「無理、しなくても良いのよ～？」
「むしろ率先して無理しようとしてるのはあんたじゃん！　・・・んまぁ良いや。奢ってもらえるなら奢ってもらっちゃおっと。」

エミリアがトレーニングウェアから私服に着替える間に、私は三回ほど声を掛けられた。何だろう、そんなにこの辺りの人達は飢えているのだろうか。ちなみに、その内の最後の一人は少し強引に迫って来たので、指と足の甲を砕いてあげたら随分と大人しくなった。なるべく音を出さないようにしたのだが、やはり少々注目を集めてしまったのは悔やまれる所だ。
うずくまる男性を尻目に、エミリアとショッピングフロアのフードエリアへと行く事にした。

「ねね、ここまで来といてなんだけどさ、ホントに良かったの？その、奢ってもらっちゃって・・・。」
「あらあら～、別に良いのよ～？　だってエミリアがちゃんとトレーニングやった、そのご褒美だもの～。」
「ご褒美か～・・・なんだかそう言われると、なんて言うか・・・あ、ステーキ来た！」

と、素晴らしいタイミングでステーキが到着する。店員が、「鉄

板が熱くなっておりますので、お気を付けて、お召し上がりください。」と言いながら、テーブルの上にステーキの乗った鉄板を置く。ステーキからはジュージューと言う良い音と、醤油ベースと思われる香ばしいソースの香りが立ち上がっている。と、その横にスープとご飯の大盛りがそっと置かれる。

スープのお椀は小さいが、ご飯はステーキと一緒に見ても、若干多く感じるぐらいの量があった。

「あら～、思ったより大きいのね～。さ、冷めないうちにどうぞ～？」

「いっただっきまーっす！」

テンション高めで食べ始めるエミリア。先ほどまでの恐縮ぶりが嘘のようだ。こうして見ると、本当に子供にしか見えない。と、エミリアが付け合せのグリーンピースをそっと避けるのが目に入った。

「エミリア～？　付け合せも含めて完食しないと払ってあげないわよ～？」

「むぐ！　むぐぐ・・・」

口の中のご飯を咀嚼しつつ飲み込むと、渋々と言った様子でグリーンピースを先に、飲み込むようにして食べ始める。どうやらエミリアは、嫌いな物を先に食べてしまう派らしい。

グリーンピースを食べ終えると、またステーキとご飯とスープをリズミカルに食べ始める。

その内に私の頼んだ、エミリアの物より二周りほど小さなステーキが到着する。

このステーキハウス自体は業界大手のチェーン店であり、多くのアルバイトを抱えている事や値段が安いことなどから冷凍食品なのでは無いかと言われているのだが、それにしても美味しい。そして

この醤油ベースのソースは、ニューデイズに本社を置くこの店らしい、ステーキの脂っぽさが六割軽減されるほどのあっさり味となっている。非常に美味しい。
余談だが、ニューデイズではステーキと言う食べ方その物が流行らないせいで、このステーキハウスの本社はニューデイズだが最も大きな勢力を持つのはモトゥブだったりするらしい。ローグスやなんかも、この醤油ソースのステーキに舌鼓を打っているのだろうか。
食べ終わって会計を済ませる。値段はやはり思ったほど張らなかった。この良心的な価格も、大手チェーン店の魅力だろう。

店を出てから、エミリアが行きたいと言う所に付き合って色んな所を周る。洋服店に始まり、ゲーム屋、フィギュア専門店、CD店などなど。途中で親友に明日の朝に武器を届けてもらえる事などを話しながら、物を買ったり買わなかったりしつつ、ショッピングフロアをぶらついた。そうして最後に入った店が、ぬいぐるみやキャラクターグッズの売っている店だった。

「あらあら〜。」

そう言いながら大きめのパノンのぬいぐるみを手に取る。もふも

ふむにむにしていて、非常に手触りが良い。本物に比べて圧倒的デフォルメされているし、何より二分の一程度の背丈しか無いのだが、じっと見ていると何故かキュンと来る。それの腕をぴこぴこと動かしながら、適当にアテレコを付けてみる。

「Ｏｖｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｄ！　Ｂｅｔｔｅｒ　ｏｆｆ　ｄｅａｄ！」

「いや、何でそこでそんなセリフ付けるのよ？！　って言うかどうしてそのセリフをチョイスしたの！？」

横からエミリアに突っ込まれたが、あまり気にしない事にする。買おうかと思い、それに付いていた値札を見て愕然とする。丁度、ステーキ二食分に色を付けたぐらいの値段がした。これは流石に買えない。諦めて棚に戻す。

それからエミリアが、私が置いたぬいぐるみを手にとって値札を見て「うわっ」と小さく漏らしてから、すぐに棚に戻す。その後、エミリアはその店に売っていた『ファイアフライ』と言うスカイクラッドのロゴを背負ったメタルファイターをデフォルメした、小さめのぬいぐるみを購入していた。

「それじゃ、もう帰りましょうか～？」

「うん、そうだね。で、さっき話してたけどさ、ホントにちゃんと明日の朝に武器着くの？　明日も仕事請けれないとかってなったら・・・」

エミリアがそこまで言うと、私の携帯端末が鳴り始める。

「ごめんなさいエミリア～、ちょっと待っててね～？」
「あ、うん。ってかあたしもう帰るからさ。じゃね！」

そう言ってぱたぱたと駆け出すエミリアの背中を眺めながら、私の安くて古いせいで音声のみの携帯端末を開く。聞こえて来たのはチェルシーの声だった。

「今おヒマかしラ～？」
「ええ～、一応は～。何か書類に不備でもありましたか～？」
「ウウン、そうじゃ無いのヨ。ただネ、チョ～ット変な依頼が入ったカラ、アナタに頼もうと思ってネ。」
「ええと～、武器が無いんですけれど～？」
「アア、このお仕事、武器要らないのヨ。」
「武器が要らないお仕事、ですか～？」

「りあせんせー。なんでおめめのしろいとこがくろいのー？」
「ん～、そうね～・・・こっちの方が、ちょっとオシャレでしょう～？」
「えー、ボクこわーい。」
「わたしもー。」
「あらあら～。」

さて、今私は何処に居るのか。惑星モトゥブにある、ＳＥＥＤ事変によって身寄りの無くなった子供を育てる、養育施設に来ているのだ。もっと分かり易く言うならば孤児院か。
そんな所に何故居るのか。それは仕事だからだ。何でも、孤児の人数に対してスタッフが圧倒的に少なく、更にその大事なスタッフの一人が風邪をこじらせてしまったらしく、完全に手が回らなくなってしまったそうだ。ちなみに今、全く同じ依頼でバスクと言う男性のキャストも一緒に居たりする。海底レリクスで私に話し掛けて来た、あのキャストだった。
「久しぶりだな」と言われて、一瞬誰か分からなかったのはご愛嬌。私がリトルウィングに担ぎこまれたのとほぼ同時ぐらいに、たまたま仕事で一緒になったクラウチさんに誘われてリトルウィングに入ったらしい。何でも、「フリーはもうキツイと思っていた」との事。
その意見には同意せざるを得ない。リトルウィングのように、軍事会社だと事務的な手続き等がしっかりと行われるし、依頼の裏側

の方の調査も別でやって貰えるので、非合法な依頼と言うのはほぼ有り得ないのだが、フリーだとそうも言ってられない。
事務的な手続きはほとんどあやふやだし、裏側の調査も一人じゃ出来ないので、気が付いたら強盗の片棒を担がされているなんて事はよくある話で、慎重にそういう類いの依頼を断るにしても、そういう類いの依頼ぐらいしか来ないのだから選びようが無いのだ。
何より、事務的な手続きうんぬんがあやふやなせいで、報酬を貰えないなんて事もしょっちゅうだったりする。
しかし、だからと言って誰でも気軽に軍事会社に入れる訳では無いのだ。軍事会社と言うのも、有る意味では一種のサービス業だ。サービス業と言ったら、信用がまず第一に来る。となると、やはり厳しくしてくなるのは身元調査だろう。
例えば強盗犯に銀行の警備を誰が依頼するだろうか。
例えばシリアルキラーに要人警護を誰が依頼するだろうか。
そう言う事を考えていくと、どうしても身元不明瞭な人は、どんなに優秀だったとしても入れる訳には行かなくなってくる。これが普通だ。
だが、この辺がリトルウィングはオカシイのだ。実力さえあれば前科持ちも歓迎なんて、サービス業としてはあってはならないスタイルだ。しかしその反面、他の軍事会社の追随を一切許さない程に、依頼料が安い。
それこそ、他の軍事会社を小売価格とするならば、リトルウィングは差し詰め卸売り価格と言った所か。本来ならばそこまで安く出来ないハズのサービス業の依頼料を、リトルウィングはまさかの信用を犠牲にする事で可能としているのだ。
それでも倒産したりしていないのは、社員が現場で悪さをしていない事に起因する『無いのに有る信用』と、それこそ子供のお小遣いでも依頼出来る程の依頼料の安さのお陰だろう。
お陰で、出所不明瞭な怪しい依頼も含めて、小さい依頼なら意外と多く入って来ている。一つの依頼でガッポリ稼ぐのも、大量の依

頼でチマチマ稼ぐのも、過程は違っても最終的な金額は変わらないと言う事だ。
まぁ何にせよ、余りにも依頼料が格安なせいで、その依頼の中には今回の保母さんのピンチヒッターのように、軍事会社として果たして受けて良いのかと聞き返したくなるような物も含まれていたりするのだが。
他にもメタルファイターによるヒーローショーの悪役や、サイン会の警備員、害虫駆除にスクールの送迎バスの運転手も依頼される事があるらしい。

「せんせーのおめめＳＥＥＤみたーい！」
「あらあら～。それじゃ、襲っちゃうわよ～？」
「わー！にげろー！」
「きゃー！」

私は子供が好きだ。いや、ロリコンだとかショタコンだとか、そう言う事では断じてない。愛玩動物等に向けて可愛らしいと思うような感情であって、恋愛感情とはまた違った物だ。
ともかくそう言う訳で、今の仕事も何だかんだ言って楽しかったりする。まぁ、軍事会社の仕事では無いとはおもっては居るが。それでも楽しいものは楽しいのだ。
ちなみに、バスクは最初の方こそ怖がられていたが、すぐに打ち解けてしまっていた。その手際を見る限り、どうやら年少者の扱いにそれなり以上の心得があるらしかった。バスクが子供達と遊ぶその姿は、休日に稀に見られる親子連れのようだった。
不意に、自分も昔は父親にあんな風に遊んでもらったことを思い出して、胸が少し締め付けられるような感覚に襲われた。
両親は自分の手で殺してしまったし、妹もＳＥＥＤ事変の戦火に飲まれて死んだと聞いている。実際に妹の遺体に会う機会は無かったが、ライアさんが嘘を言うとも考え難い。

ああ、そうだ。今思い出した。私は子供達に懐かれて良いような、そんな物じゃ無いんだった。この子達の両親や兄弟を奪った物と、同類なんだった。
そんな事を考えながらバスクの方を眺めていると、不意に私の足の後ろ辺りに体当たりをされたような感触が伝わる。足のその感触のあった辺りを見ると、ニューマンの男の子が無邪気な笑顔で私を見上げていた。

「これで、全員寝付いたか？」

バスクがなるべく小さい声で私に聞いてくる。その声で目が覚める。ウッカリ子供達と一緒に寝てしまう所だった。

「え、ええ～。そうですね～。」
「では、そろそろ帰るとするか。こちらで午後九時頃なんだ、クラッド6に着いた頃には午前五時ぐらいになるな。」
「ええ～。それでは、操縦はお任せしますね～？　私もう眠いので～。」
「む・・・まぁ、そうだな。居眠り操縦で小惑星にぶつかられては堪ったものじゃないからな。そうだな、俺が操縦しよう。うむ、それが良い。」
「？」

バスクの様子が何処か変だ。私は養育施設の園長に仕事の終了を報告して、来た時に乗っていた、いつも使っている船に乗り込む。

続いてバスクが乗り込み、操縦桿を握る。
が、微妙に様子がおかしい。
「緊張してるんですか～？」
「い、いや、そんな事は無いぞ？　ただ・・・」
「ただ？」
俯いて。目線を逸らしながら、恥ずかしそうにバスクが言う。
「・・・中型以上の、船の操縦を・・・した事が無いんだ・・・と、言うか・・・小型の免許しか、無いんだ・・・。」
結局、法律的にも操縦的にも危険なので、眠い目をコーヒーで無理矢理覚ましながら私が操縦することになったのは、言うまでも無いだろう。

第八話（間）「リア・ゲートのやけに長い休日」（後書き）

如何だったでしょうか？次回からは三章に入っていきますよ！
そして、前回と同じ内容でアンケートを取ります！是非是非是非是非！ご参加ください！！！アナタの投票で、リアの過去とその他モロモロが変わるかもしれませんよ！！！　あ、ちなみに、前回投票していただいた方も、また投票していただいて構いませんので、ガッシガッシご投票ください！！！！

A箱

B圭

C目

ではまた！ごきげんようソローッハラショー！

※追記：ＰＳＰが壊れてしまったので、次回更新は大きく遅れると思います。申し訳ありませんが、ご了承の程、よろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1204t/

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

2011年11月17日11時06分発行